

# 中島川石橋群の成立過程

——長崎の水災史と石橋群に関する研究（下の1）——

林 一 馬\*

## A Historical Investigation of Flood Disasters and Stone Arch Bridges in NAGASAKI (Part. III)

Kazuma HAYASHI

### 〈下篇の1 目次〉

- 9. 承応～明暦年間架設の4橋
- 10. 寛文年間の動向
- 11. 延宝年間の架橋
- 12. 中島川石橋群の完成

### 9. 承応～明暦年間架設の4橋

前々節までに見てきたように、正保4年（1647）6月の洪水後、慶安年間には、

- ①眼鏡橋——慶安元年（1648）
- ②袋 橋——同 2年（1649）4月以前
- ③古川橋——同 上
- ④大手橋——同 3年（1650）7月または10月
- ⑤玉帯橋——同 4年（1651）2月

という5橋が相次いで架設され、長崎のアーチ石橋群形成の途が拓かれた。そこで本節以下の4節では、これに続く石橋建設の経過を辿り、長崎における特に「中島川石橋群」が成就するまでの動向を省察しておくことにする。この石橋群の完成には、慶安年間より数えて約50年を要するのだが、それを年時的なまとりとしてみた場合、慶安年間（1648～51）を仮に第Ⅰ期の前半とすれば、

第Ⅰ期後半：承応～明暦年間（1652～57）

第Ⅱ期前半：寛文年間（1661～73）

第Ⅱ期後半：延宝年間（1673～1680）

第Ⅲ期：元禄年間（1688～1803）

という3期（やや細かくには5期）に大別することができようかと思う。よって以下には、この順序に従ってみてゆくことにしたい。

まず本節では、上述の第Ⅰ期後半にあたる承応～明暦年間を対象とするが、当該年間には先にも少しふれたように、高麗橋、一瀬橋、中川橋及び一覽橋の計4橋がそれぞれ創架される。そこで各橋の架設事情について、直接史料に当たりつつ検討を加えてゆくことにしよう。

### ⑥高麗橋——承応元年（1652）冬〔図9-1〕

まず例によって図志の記事を示せば、次のとおりである。

第二橋 在伊勢祠前，承応元年，季冬，明人平江府等建

文竜の増補図志も全く同文を記し、古今集覧所引の志稿でも

在二第一橋西伊勢廟前，承応元年季冬，明客平江府等建

とあって、内容的には差違が認められない。これに対し、金井俊行氏の増補長崎略史の「橋梁志」では、

\*建築学教室

1984年6月15日受付

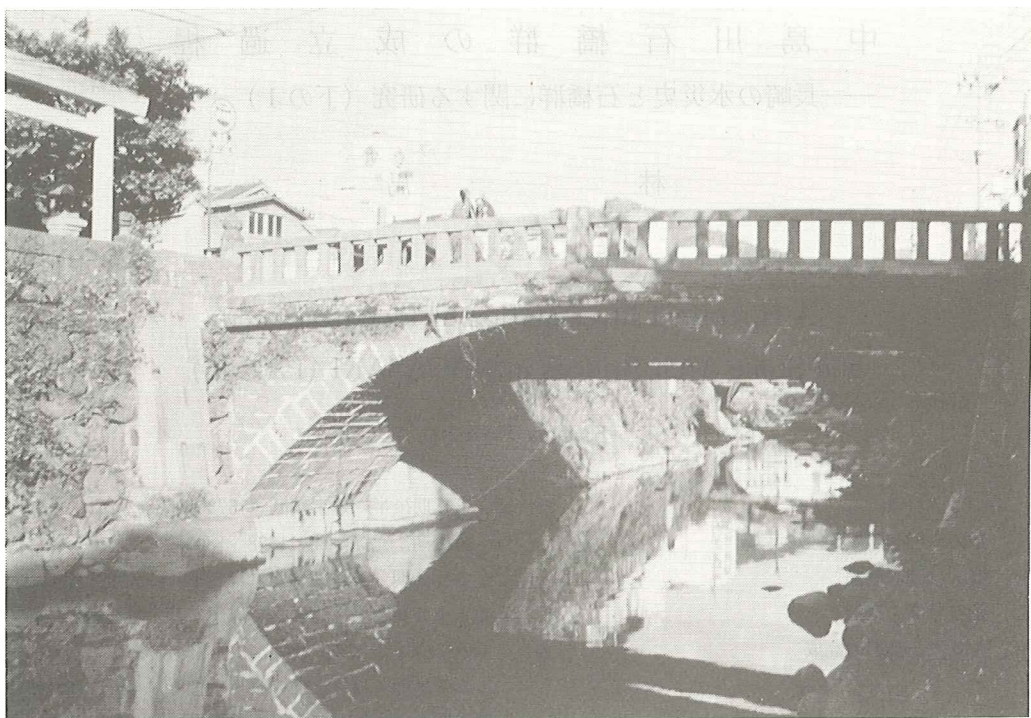


図9-1. 高麗橋（下流側全景，左上に伊勢宮の鳥居がみえる）

承応元年十二月明人江平府等之を架す

と記していて、季冬を12月と特定していたこと、そしてこれはおそらく誤認かと思われるが、平江府を江平府に綴っていた点が異なる。

先ず前者の時期については、金井氏がそれを何に拠られたか不明だし<sup>1)</sup>、また宮田安氏の指摘によれば、

県立図書館渡辺文庫のなかに、古賀十二郎翁自筆の長崎名勝古蹟誌があり、これをみると、この橋の伊勢宮側石欄に、承応元年十一月二十一日、嶋千太夫 嶋讃岐 が寄進し奉るという彫刻があると書いてあるが現在ではもう残っていない。<sup>2)</sup>

とあって、これとも一致しない。それゆえ現時点では、この時期については取合えず図志以下に倣って「季冬」と幅広く解しておくのが穏当かと考えられる。

がしかし、一方の架設者については、高麗橋の架け方が町筋の方向——すなわち両岸の八幡町（当時は新紙屋町と呼ばれた）と伊勢町（同じく新高麗町、むしろ現在の橋名は逆にこれにもとづいて命名されたのであろう）の道路中軸線からはずれて、その北端の方は伊勢宮の鳥居前に真直ぐ達するように構えられている

こと<sup>3)</sup>、つまりその形状はまさに同宮の門前橋としてあったことを考慮すれば、その架設に際して町中に寄進を募り、その筆頭発起人として伊勢宮の神主が当たったということは、十分ありえたところかと想像される。すなわち享和2年（1802）の『市中明細帳』<sup>4)</sup>にも伊勢宮の神主が「惣町勤化」を以て架設したという説が採られているが<sup>5)</sup>、少なくとも形式的にはこれを是認してよいのではないかということである。しかしその場合、だからといって図志等という「明人平江府等建」を全くの異説として退けるには及ばないだろう。というのは、これは要するに寄進者の実態——即ちそれに応じた高額寄附者達の方を以て表現したと受取っておくことが、これまた十分に許容されようからである。

なお、図志や志稿にいう「平江府」とは、その文脈に反して人名でなく中国蘇州の地名だということは、すでに渡辺庫輔氏や宮田安氏が指摘された通りであろう。金井氏が「江平府」と逆に綴っておられたのは、あるいはこれを配慮しての改筆だったかも知れないが、ともあれこの場合の明人・明客達とは、その橋の位置からしても、そこより程近い「興福寺の檀徒である蘇



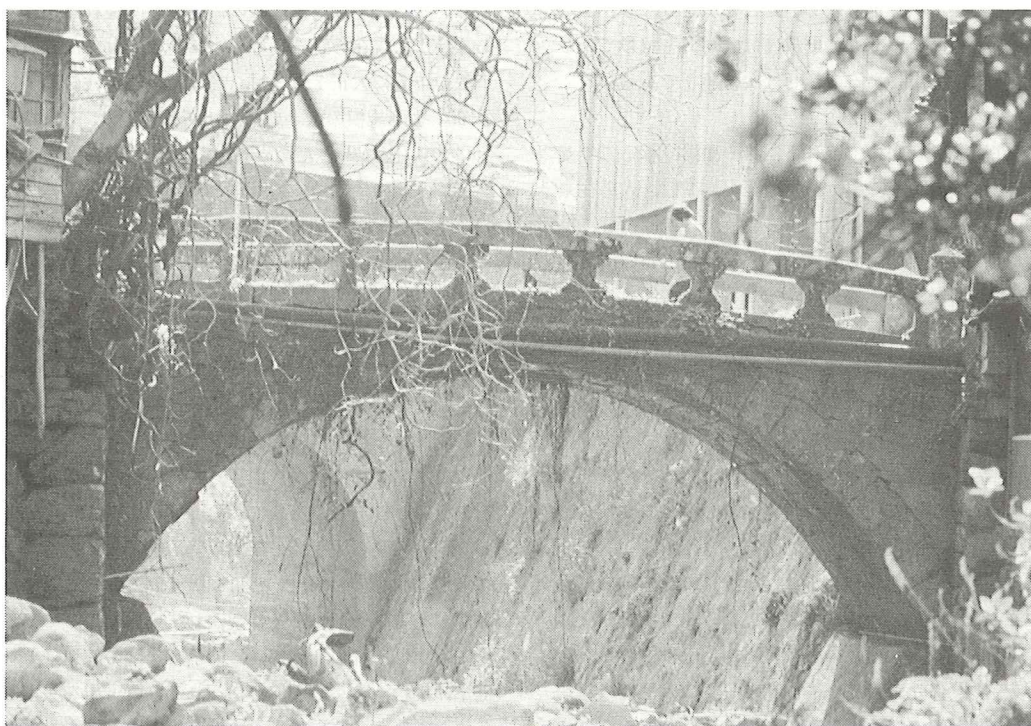


図9-2. 一瀬橋（上流側全景）

州府の人たち」と解された宮田氏の所説が首肯されようこと、言うまでもない。即ちこの橋の架設によって、興福寺を中心とする中島川中流域の東岸地区から伊勢町を経て長崎街道方面へと出るその通行が著しく利便になったことは疑えないだろうからだ。それにまた、その橋の位置に加えて承応元年という時期からすれば、実質的な寄進者を興福寺ゆかりの明客達に求めるのも、当時としては甚だ自然な成行きだったと推量されようからである。というのも丁度その頃、興福寺の第三代住持逸然性融いつねんしょうゆうらが中心となって中国から隠元を招請するという、わが国の黄檗宗の歴史にとって文字通り劃期的な企てが起生するのだが、その第一回目の請啓は同年の4月6日付でしたためられていたこと、そしてその請啓二通の中、逸然のでない他の一通はまさに当時の長崎における唐通事や唐三ヶ寺の檀越らの代表者を網羅した観のある13名の連記となっていたというように<sup>6)</sup>、この時期の興福寺にはまことに熱いエネルギーが結集されていたからであった。これはつまり、上の推量を傍証するに十分な史的状況といえようからである。

しかしながら他方で、それと全く同時に、先述の寛

永長崎図や正保頃の長崎図にはまだ伊勢宮自体の姿が見えなかったごとく、同宮は直前の正保3年（1646）に現在の宮司・島氏の初祖を出雲大社から迎え、それと相前後して漸く本格的な社殿整備に取掛っていたとされるから<sup>7)</sup>、この石橋の架設はそのことに呼応した企画だったと考えられてよいだろう。言いかえれば、この場合の架橋計画はもともと興福寺側より出たのではなく、むしろその主体は伊勢宮の側にあったとする方が適切だろうということである。そしてたとえば、『長崎市史』地誌篇の「伊勢宮神社」の項に、

正保元年 長崎奉行馬場三郎左衛門・山崎権八郎より宮地として伊勢町川端に於て五ヶ所貳拾貳間の地を賜ひ、云々<sup>8)</sup>

とあるのがさほど史実に遠くないとすれば、その背後に奉行の意向を想定することも強ち不可能ではなからう。

⑦一瀬橋——承応2年（1653）5月〔図9-2〕

この橋の名は、図志以下の諸史料のいずれにもそう

あるごとく、夙に定着していたことが知られる。また、その由来等についても諸史料はほぼ同文を記しているが、やはり図志によって示せば次の通りである。

在眉嶽〔彦山のこ〕下、跨一瀬溪、承応二年五月、潁川陳道隆建、自是路至火見嶺口、人馬往來常不絶、冬天飄雪兩山玉、立橋上、宛成白虹、樵夫鶴衣独帰循山而過橋上、一景趣也、題曰山橋樵雪、即居鎮池十二景之一

まことに簡潔にして要を得た説明で、殆ど付加えるべき事柄も疑うべき内容もないといえよう。蛇足を承知で申添えるならば、

- 1) この橋の寄進者陳道隆（日本名：潁川藤左衛門）は、寛永18年（1641）より大通事の職にあり、当時福濟寺第一の大檀越だったこと。<sup>9)</sup>
- 2) 上引文中にも記されていたように、この橋は火見嶺口に当たること。すなわち先にみた大手橋や次にみる中川橋と共にこの橋は長崎街道上に位置し、市域との関係から言えば、内門としての大手橋に対して外門とでもいうべき意義を担っていたであろうこと。
- 3) 今日でもその風情はなお幾分残っているが、この橋付近の景観は——「人馬ノ往來絶ヘルコトナシ」という説明とはやや矛盾するが——図志の著者・長崎君舒自身によって「山橋樵雪」と題されつつ「長崎十二景」の一として選定されていたごとく<sup>10)</sup>、長崎の代表的な名勝として以後親しまれてきたこと。

といった各点は、やはり確認しておいてよいだろう。特に今日の意義からすれば、この橋と周囲の風致——それ故にも「一の瀬口」として市の史跡指定を受けているのであろう——は、もはや長崎に残る数少ない歴史的な名勝、伝統的景観であるだけに、その修復保全こそが探索さるべきであって、石橋の解体撤去はむろんのこと、災害復旧に名を借りたコンクリート漬けの護岸工事などは断じて許されるものではあるまい。

#### ⑧中川橋（古橋）——承応3年（1654）3月

図志や古今集覧には「中溪橋」と記していたが、増補図志ではその下に「俗作中川」と割注記し、名勝図絵では「中川橋」と書いていたことからすれば、今日の表記「中川橋」はすでに江戸時代の後期にはほぼ定着していたことが分かる。ただしその発音の方は、古今集覧には「ナカガワ」、名勝図絵には「なかがう」と振り仮名されており、増補長崎略史にいたって漸く「ナ

カゴ」とみえるから、この確定はやや遅れるようである。また現在の正式名称「古橋」の方は、その直ぐ下手の位置に大正7年3月（右岸上流側親柱の刻字による）、より規模の大きいアーチ石橋を架け、それを新たに「中川橋」としたため改称された結果だという。<sup>11)</sup>

さて、この橋についてもたとえば図志に、

在長崎邑鳴瀧之下、承応三年三月 林守堅建

とあったその史実性を疑うべき理由は何ら見出されない。すなわち前年の5月に陳道隆の寄進で一瀬橋が架設されたのに続いて、本年3月には同じく大通事の職にあり、また当時崇福寺の四大檀越の一人だった林守堅（日本名：林仁兵衛）によってこの橋が喜捨されたというわけである。そしてこのように慶安3年（1650）の高一覧による大手橋の架設以降、唐通事による石橋寄進が相次ぐのだが、そこに同職者間における対抗意識が窺えようとは既に多く説かれているところである。宮田安氏はそれに加えて、この承応年間の陳道隆と林守堅の場合、各々その前年にそれぞれ妻と母を失くしていたことから、「亡き人への追善供養の気持もあったのではなかろうか」<sup>12)</sup>と推測されている。恐らくそのいずれもが妥当するとみてよいだろうが、しかしそもそも架橋という事業は、その対象からして必然的に公的な性格を帯びざるをえない以上、いわばそうした個人的な動機にすべてを帰せしめてよいものかはいささか疑わしい。特にこの一瀬橋と中川橋の両橋の場合には、その立地は行政区分上市外に属し、しかも長崎街道という長崎の町にとって最も重要な陸路幹線上に位置するだけに、そこには両名による寄進以前に、その街道自体の整備確立というより公的な立場からの目的意識なり事業計画が、その前提として先行していたと考えられよう。換言するならば、この街道上のおそらく大手橋をも加えた3橋が、いずれも「唐通事」という公職にある人々の寄進によって成立していたのは単なる偶然の一致ではなく、むしろ——これを史料上で明証することは難しいにしても——その下地として幕府の意向を帯した長崎奉行あたりの要請があったかと推断することも、決して無謀ではなかろうということである。丁度、先に見たように、茂木道の場合にはその起点としてあった玉帯橋が——たとえ直接的な要望はどこから出てきたにせよ——奉行自身によって架設されていたこととほぼ同然にである。したがってこの意味では、こうした街道上にあるこれら4橋の場



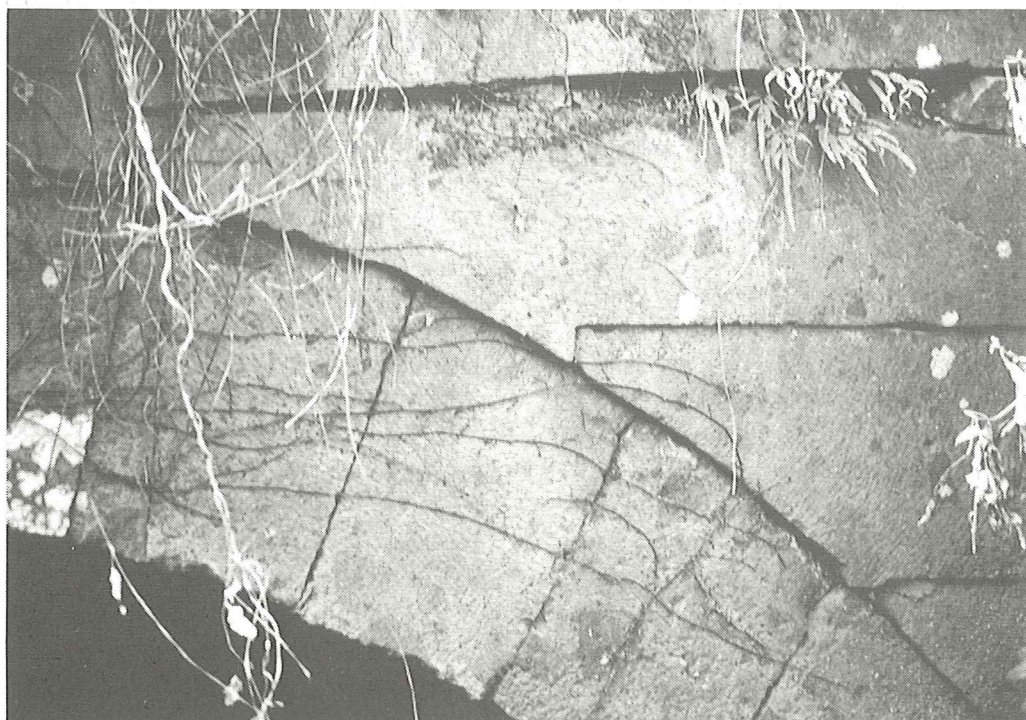


図9-3. 中川橋（上：上流側の拱環石と壁石部分，下：下流側の側面石組み）



合、いずれも公職にある者の一手寄進によって架設され、そして恐らくはその結果であろうが架設者の氏名と架設年月が明確にとどめられていたことは、一定の必然性にもとづく帰着と考えるべきで、その点、中島川下流域の市中、すなわち外町に属する諸橋とは一線を劃するものがあったと言ってもよからう。むろん唐通事や奉行自身にそれを可能とする財力が先ずあり、そしてそれらの中のどの橋に関与するかという点では、その時々事情や私的な理由も多分あっただろうにしてもである。

また加うるに、以上見てきたごとく慶安3年の大手橋以降、承応3年のこの中川橋まで毎年一橋ずつの架設というハイ・ペースが持続され、しかもそのいずれもが市の周縁部の道路筋の整備に深く関わるものだったとすれば、そこには上述のようにひとつの統一的な計画の遂行を讀取ることができようが、しかし更にその遠因としては、正保4年6月の洪水による被害という苦い経験が裏打ちされていたとみることも、強ち不可能ではあるまい。つまり少なくともこの中川橋あたりまでは、上記洪水の影響が直接間接に及んでいたのではなかったか、というようにである。そしてその際に何故に石橋でかという問題は、むろんその堅牢さや耐久性が期待されてのことに違いないが、一層直接には慶安元年より同2年4月以前に完成されたと考えられる、前述の3橋の先例が絶大な影響力を有していただろうことも疑えない。そして、この先例3橋をして眼鏡橋・袋橋・古川橋に該当しようとは先に推定したところだが、実はこのことはその際に見たように、これらの架橋の要請が代官から発せられていたという点からも、改めて追認されようかと思う。というのは、それら3橋が外町に属すること既に述べた通りだが、その当時の——即ち最終的には内町・外町の区別が廃される元禄12年(1699)以前の——外町とは、まさしく内町の奉行に対して代官の支配するところだったからにほかならない。

ところで、当該の中川橋については、いま一つ留意しておきたい点がある。それはこの橋は径間5.1m、幅3.0mというように中島川水系では最小の規模であるが、そのスパンデル部の壁石と勾欄の地覆石の積み方には実に丁寧な仕事ぶりがうかがえるという事実である。すなわち前頁に掲げる写真〔図9-3〕にも見られるとおり、この橋のばあい元来の橋面の反りが強かったせいか、その壁石と地覆石はいずれもかなり斜めに据えられていた。それ故、おそらくそれらの石の迂り

落ちを防止する目的でだろうが、上部に積重ねられる石の下面は下部の石の上面に残された凹凸に正確に噛合せるべく加工され、また先端部分では鎌型様の継手が細工されてもいた、というようにである。むろん中島川の他の石橋の場合には、その壁石はきちんと水平に目地を通して布積みされ、その径間も比較的大きいことから地覆石の勾配も殆ど問題にならなかったといえればそれまでだし、また何れを以て技術水準の高低を判定すべきかとなると、これは一概に言いいうところでもあるまい。しかしともあれこの橋の現場での加工の細心さと、そして恐らくは寛永年間頃に達成されたと考えられる石積みの構築技法でいうところの「切込ハギ」<sup>13)</sup>の応用であろうが、その技術のたしかさはやはり注目しておいてよいと思われる。管見では、ほぼ同様な加工は、寺町の寺院門前における石垣などを別にすれば、滝ノ観音のらん橋(図1-8参照)とやや粗雑ながら一瀬橋の上流側右岸寄りのスパンデル部にしか類例を見出しえていないのだが、らん橋が失われてしまった今となつては、中川橋の実例としての貴重さが改めて思い知られるといえよう。

なお、現在この橋は、かつての親柱を埋込んだ形で橋面が約1m程かさ上げされ、その上に両端の取付け道路(旧長崎街道)のなだらかな坂道とともに石畳舗装が施されているが、この改修工事は既に指摘されているとおり<sup>14)</sup>明治初年頃になされたと考えられる。幹線道路筋が下流側に変更されたのが明治14年だったということ、そして現在みられるその橋と付近の欄干(手すり)の形状は、長めの直方体の石を水平に2段重ねにして天端はかまぼこ型に加工されたものだが〔図9-4〕、これは長崎の東山手や南山手の旧居留地内によく見られる手法と同一のものであることも、それを裏付けるであろう。

#### ⑨一覽橋——明暦3年(1657)5月

慶安元年(1648)より承応3年(1654)までの7年間、一年に一橋ずつ以上というペースで継続されてきた石橋建設は、ここにきて漸く3年間の中断が生じる。そしてこのあとは後にみるように寛文年間の中頃まで、より長い断絶が訪れるようになる。その意味でこの一覽橋の架設は、年時的に他の橋との連続性が乏しいが、同様に位置的にも先行の諸橋とはやや隔絶した感がある。すなわちその位置は、上流域の大手橋や高麗橋と下流域の眼鏡橋以下3橋とのほぼ中間に当たり、まさに中島川中流域では最初の石橋となっていたからであ



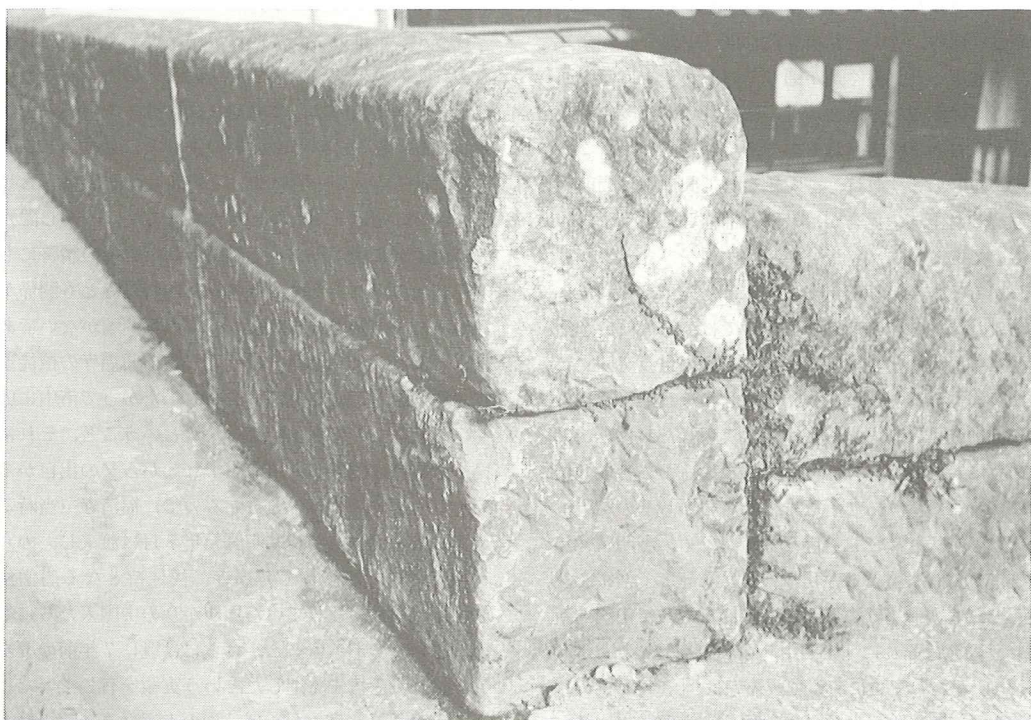


図9-4. 中川橋の現在の欄干（左側が橋面）

る。また先述の正保頃の長崎図では、この付近にはふつうの板橋すら見られず、一方寛文末頃の屏風絵（神戸市立博物館蔵）にいたって漸く下流側の東新橋の位置に板橋が描かれていた。がしかし、この板橋とて寛文3年の大火以前に遡るとは考えられないから、寛永長崎図の古町橋の位置にみられたような軽微な土橋か丸木橋を別にすれば、この一覧橋は石造と木造を問わず、中島川中流域では最初の本格的な橋だったとみられるわけである。

さて、この石橋が明暦3年5月に架設されたことは、やはり図志によれば、

第六橋 オケヤマデ 在笹桶街，明暦三年五月，渤海久兵衛  
高一覧募建

とあり（但し、振り仮名は増補図志により補った）、以降の諸書もほぼ同文を記すこと、そしてこの橋の左岸上流側たもとに立てられていた碑石<sup>15)</sup>に、

明 暦 三 年 渤海久兵衛募建  
南 無 度 人 師 菩 薩  
丁酉五月吉旦

と刻まれていたことから、まず確実視される。とすれば、問題は何故にこの時期にこの位置にか、ということになるが、この点は興福寺との関連で理解するのが最も至当ではないか、と私は考えたい。

というのは、まずその位置から申せば、この橋を西（右岸）から東へ渡って寺町筋に向えば自ずと興福寺の境内に突当たること、即ちこの意味でこの橋は興福寺の門前橋としてあったとみてまず大過ないだろうからである。事実、この橋の上から東を望めば、興福寺の大雄宝殿の屋根が大きく眼前に迫ってきて、あたかもそこはすでにその境内であるかと錯覚せしめるほどなのであった。しかも先述の寛永長崎図や正保長崎図によれば、西岸の桶屋町の通りを川越えに東へと延長してもその道は今日のいわゆる「中通り」に該当する「かうじや町」（正保長崎図）の通りに出るだけで、そこより寺町筋の興福寺下へと導く道はまだ出来ていな

かったと見られる。ところが以後の諸地図ではいずれも今日と同様、この一覽橋を渡れば「中通り」と交叉して興福寺へと真直ぐ道が通じているから、この中通りと寺町の間を結ぶ道自体も、やはりこの前後に新しく拓かれたかと考えられるのであった<sup>16)</sup>。それ故、この推量が正しいとすれば、一覽橋をして興福寺の門前橋と理解した上述の見方が、一段と補強されようと思われるのである。

しかも一方、時期の点から言えば、先にもふれたようにこれの約5年程前から興福寺では、三代住持逸然性融が中心となって中国より隠元禪師の東渡を仰ぐことが最大の課題となっていた。そしてそれがようやく3年前の承応3年(1654)7月に実現したわけだが、その反響は甚だ大きく、隠元に参見するため各地の僧俗が同寺に雲集することとなった。しかしその結果、同寺は既存の建物では狭隘となったため、翌明暦元年(1655)には外堂及び茅房(便所)を建てて僧衆を住まわせ、また諸方から贈られた茶儀をもって山門を新築し、隠元はそれに「東明山」なる額を扁したとされる<sup>17)</sup>。すなわちここにおいて興福寺は、「在日華僑の弔葬場から一転して、一方の大禅林」<sup>18)</sup>へと変容し、それに相応しい寺観を最終的に完成させたと見られるのであった。したがってその2年後の5月に——とは言え、山門の新築が明暦元年中に落成していたかどうかは疑わしく、また石橋の工事に最低半年間ほどは要したであろうから、実際には殆ど間断なくとみてよいだろうが、とにかく——その延長として、同寺の門前橋を創架したと解するのは、極めて時期的に適合した処置だったと考えられるわけである。

もとより隠元自身は、明暦元年の8月9日には興福寺を発して摂津富田の普門寺に向っており、一覽橋の完成した同3年5月にはなお普門寺にとどまっていたから、この架橋に直接関与していたとは思われない。しかし少なくとも上述のような状況からすれば、この橋の架設が興福寺の寺観整備の一環として計画され実施に移されたとみることが、まず異議なく承されるところではなからうか。やや臆測を大胆にするならば、その橋の工事がはじめられたと推測される明暦2年末頃には、隠元自身にまだ日本永住の意思はなく、むしろ早急に帰国を切望していたようであるから、当然長崎の町や興福寺側では再び隠元を出迎え、見送るということが念頭されていたかと思わなくてはならない。つまりその際の盛儀行列のコースとしても、興福寺へと真直ぐに通ずる一覽橋の竣工が待たれていたのではない

か、というようにである。

むろんこれはいささか推量が過ぎるであろうが、ともあれこの橋の架設に際して「渤海久兵衛(高一覽)募建」とあったのは、文面通り長崎在住の中国人を代表して高一覽がその募金活動の主導者になったとみてよいであろう。高一覽は先にも言及したように、むしろ皓台寺の檀越だったかと考えられるが、しかし隠元の東渡紹請に当たってはその第一及び第四の請啓にも名を連ねていたように、その当時は興福寺とも関係が深かったと見做されるから、この点は問題がないであろう。あるいはもしかするとその頃の興福寺の檀徒達には唐通事といった公職にあり、したがって市中に広く名の知れた人物が居なかったかということ、それに高一覽自身は鹿児島島の川内生まれながら父の出自からいえば福建省漳州府の人となるので、福濟寺(当時この寺には隠元に招かれて明暦元年7月に渡来し、のちに隠元のあとを受けて万福寺二代住持となる唐僧法嗣・木庵性瑠が住していた)ゆかりの中国人たちにも顔がきいたであろうこと、さらには既に7年前の慶安元年には大手橋を寄進したという実績を有していたこと、等々を勘案するならば、この人選は高一覽の個人的な意思から出たというよりは、もっと周到な配慮の結果だったと理解した方がよいかも知れない。

いずれにせよ、かくみえてくれば、この一覽橋の架設は単に高一覽という人物がその個人的な篤志から発案したのでは恐らくなく、当時の興福寺をとりまく史的状況の下で構想され、唐三ヶ寺ゆかりの中国人を中心に、多くの人々の援助加担で以て実現されたとみてまず間違いないと思われるのである。したがってその建設に際しては、再び中国人による技術指導や意匠的な基本設計といった介在の仕方があったかと想像されなくもない。隠元に随従して渡来した者は総勢30人(古今集覧所引「実録」のごとく20人説もあるが)といわれるが、既に宮田安氏も示唆されていたようにその中にはのちに宇治の黄檗山万福寺の建築指導に当たったという大眉性善らが含まれていたし、また隠元渡来の前年にはのちに錦帯橋の設計に関与したことで著名なかの独立も渡来していたというように、この頃の興福寺とその周辺には中国系の諸技術は益々充実し、蓄積を加えていたことは疑えないからであった。

さて、しかしながらこの橋の場合のごとく、その袂に石碑を立て、しかもそれには「南無度人師菩薩」といった銘文を刻していたことは、必ずしも当時の長崎における石橋建設にあって普遍的だったとはみなされ



ないであろう。それ故この点からすれば、これにはまた違った趣意が込められていたかと推量されなくもない。筆者には残念ながらその銘文の意味を正しく解釈する素養はないが、宮田安氏の指摘によれば、それは「なむとうじんすうぶうさ」と読む黄檗系の文字のようで、「結讃(黄檗宗でお経のあとに仏祖をほめたたえる言句を述べる)の最後の句にこれを用いているのは、<sup>だるまき ひやくじようき</sup>達摩忌、百丈忌、弘法大師讃などであることがわかった」といわれる<sup>19)</sup>。とすれば、かつて飯田須賀斯氏が、

結城令聞氏の説に依れば、度人師菩薩の「度」とは人を済度する意味で、度人、度衆生等の如く「迷の世界より覺の世界に渡す」意より、彼岸に導くのを意を橋梁に附会したのである。而して此の「度人」を橋の神として「度人師菩薩」と云ふものを作ったものであらう。<sup>20)</sup>

と述べておられたのよりも、一層直截にある特定の人物の供養といった意味あいを想定してみたくなるのではなからうか。——もとよりこの飯田氏の所説は何ら否定するに及ばず、当然それは最低限含意されていたとみれようから、ここにこの橋をして興福寺の門前橋と解すべきだとした上述の見方が、一つの有力な支持を得たことにはなるだろうとしてもである。

というのも実は、この橋の完成した明暦3年には、寛永9年(1632)に渡来し同12年に39歳で興福寺二代住持に就き、正保2年(1645)に同職を逸然に譲って東慮庵(幻寄山房)に隠居するまでのあいだ、同寺の実質的な堂宇建立と伽藍整備に努め、そして同時に寛永11年には眼鏡橋の前身たる酒屋町の橋を創架し、長崎のアーチ石橋創成にも大きく寄与したと考えられる、あの黙子如定が亡くなっていたからである。もちろん彼の示寂は、寺伝等によれば同年の11月30日とされているようだから<sup>21)</sup>、時期的にはやや矛盾が生じる。しかしこの点は、何も碑石が橋の竣工と同時に建てられたとのみ考えなくてよいならば、問題は解決しよう。すなわち、黙子如定の没後、例えばその一周忌などにあたって改めて師の遺徳を偲び、功績を讃える意味でこの碑石を建て、ただ年月を橋の竣工時を以て表示したに過ぎないか、などと考えれば済むだろうからである。そしてその場合には、左右振分けの不均斉さとその部分の文字の小ささからして、すでに宮田安氏も疑っておられたように、碑面右下にある「渤海久兵衛募建」の7字はあとで彫り加えられたかという可能性は、一段と高まりもするであろう。あるいは一層臆測を逞しくするならば、黙子如定の示寂がそもそも「十一月」

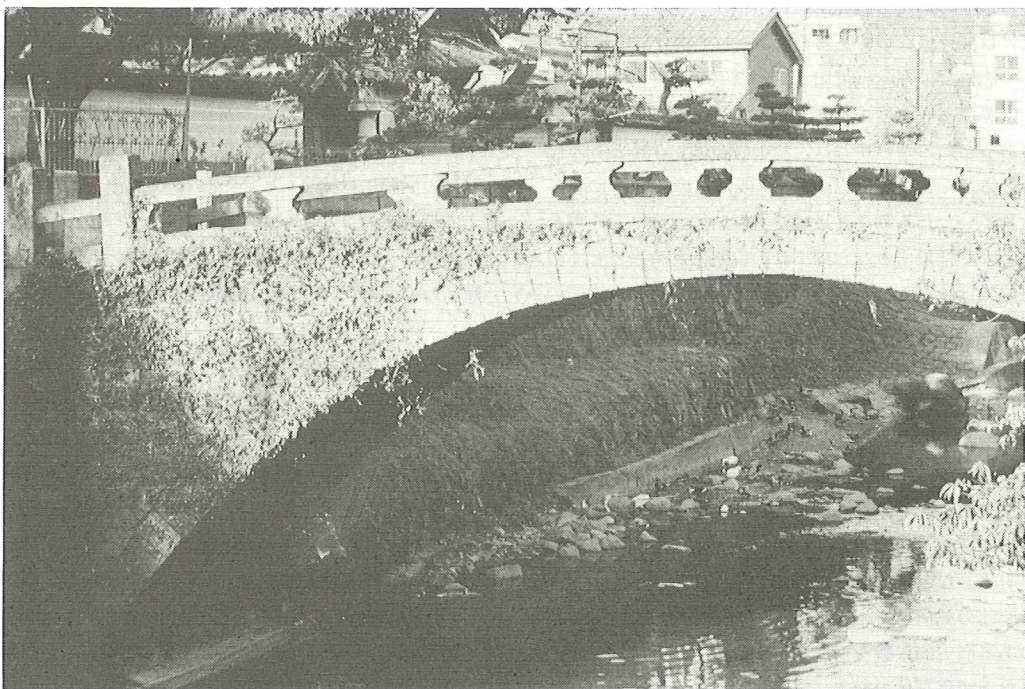


図9-5. ありし日の一覧橋(下流側より見る、左上が光永寺)

でなく、「正月」か「五月」であったものが字体の類似から誤伝されたというような可能性は果たして全然なかったであろうか。彼には墓碑銘といった比較的確実な同時代的史料がなく、また興福寺はその後寛文3年の大火で類焼していたから、おそらくそれ以前の古文書類も多くが失なわれてしまったとみなされようからである。

むろん如上は、余りにも実証性の乏しい、いわば妄想に近いものだということは十分承知しているつもりだが、しかし高一覧——皓台寺——眼鏡橋——黙子如定——興福寺——覧橋——高一覧というこの不思議な連鎖と明暦3年という年時的な付合からして、そこには何か今日では忘却されてしまった深い因縁のようなものが感得されることは慥かであろう。それに勾欄親柱の刻銘やスパンドレル部分に嵌め込まれた銘板など<sup>22)</sup>とは異なって、橋体とは別箇の——したがって時期的なずれが十分予想されるこうした碑石もしくは供養塔といったものが、中島川石橋群にあっては当時では決して一般的ではなかったと考えられること、これらからすれば少なくとも上述のごとき想像をはばたかせてみたい衝動に駆られるのもまた、誰しも禁じえないところではなからうか。もとより、だからと言って上述の臆推に固執するものではないが、しかしこのあたりにはなお進んで考究すべき事柄が伏在していることだけは間違いないであろう<sup>23)</sup>。そして古今集覧<sup>フカミ</sup>には、

志稿云、在二桶屋町一、明暦三年五月渤海高一覧募建、傍立度人師菩薩銘石、

とあったことからすれば、その碑石は少なくとも志稿の著された正徳年間以前に<sup>24)</sup>、既にその橋の傍に建てられていたであろうことは疑えない。加うるにその場合、銘文より推量するならばその位置は近時のごとくに左岸ではなく、むしろ橋向うに興福寺を望む右岸側の袂にあったとする方が相応しいのではなからうか。今次水害では橋と共にこの碑石も流失してしまったが、それがその後どうなったか筆者は未だ行方を知りえていない……。

なお、現在この橋をして一覧橋と呼ぶことは、もちろん上述の高一覧募建にもとづく明治期の命名によるものであって、江戸時代には「第六橋」もしくは「桶屋町橋」などと称されていたこと、またこの橋は光永寺門前の風情とも相俟って、中島川流域でも最も情趣のある歴史的景観を形成していたこと、更にはそのみならず橋自体の形も、径間に対する拱環石の厚さの比率、あるいは下面円弧の張り具合といった点で、中

島川石橋群の中でも特に秀れて緊張感のある美しさをもっていたと私は見ているが〔図9-5参照〕、創建当初はもちろんのこと、元文2年(1737)の再架以降も寛政7年(1795)の洪水までは擬宝珠造の親柱を有した<sup>25)</sup>一層唐風の強い壮麗な形姿だったと考えられること、こうした点は改めて——水害後2年近く経った今でも、再建の見通しが判然としない現況では尚更のこと——ここに確認しておいてよいだろう。

## 10. 寛文年間の動向

先に言及したように、明暦3年(1657)に一覧橋が創架されたあとは、万治年間(1658~60)には全く石橋に関する出来事が史料上に窺えず、再び石橋の建設が日程に上ってくるのは結局約10年を経た寛文中頃となるのだが、ここではその前後の動きをも含めてやや広く見てゆくことにしたい。とは言え、主たる対象は前節において第二期前半と分類された寛文年間(1661~73)架設の数橋について、同じく直接に史料に当たりつつそれぞれの事情を省察することにあるのは、言うまでもない。したがってここでも○内の通し番号は、前節より引継がれることとなる。

まず明暦3年以降、しばらく石橋の建設が途絶えたことについては、それ以前の架橋で最低限の主要路に関してはほぼ完了したということもあろうが、しかし同時にその間に起ったいくつかの災害や病難等の影響も大きかったとみられる。すなわち第一には、明暦3年の2年後に当たる万治2年(1659)には、長崎は未曾有の飢饉に見舞われていた。寛宝日記には、それゆえに近隣諸国より米が買付けられていたことが詳しく記録されているが、長崎港草の巻第九の冒頭「長崎飢饉」の項には次のように回顧されていた。

天正十五年長崎公領トナリテ万治マデ七十年之間ニハ飢饉回録ナドノ事未ダ記録ヲ得ザレバ考フベカラズ、コハニ万治二己亥年天下大ニ旱シテ五穀不レ登<sup>ミノラ</sup>、コトニ長崎ハ田地鮮ナケレバ豊凶ニヨラス他国ノ運漕ヲ以生民ヲ養フコトナルニ、今年諸国不熟ニテ米穀ノ回着ナク人民殆ド飢ニ及ントス、時ノ鎮君甲斐庄氏深ク憐ミ思シメサレ近国ノ諸侯ニ迎遣ハサレ米穀ヲ御求メアリテ万民ヲ救ヒタマフ、(中略)追々回着ノ米高スベテ壹万八千四百四拾七俵、此代銀三百拾貳貫百九拾九匁六分也、米ノ価ハ相庭ヨリ下直ニテ拝借アリケルト也。



一方、寛宝日記の同年条末尾には、

一 長崎中人高合四万七百人

老<sup>ケ</sup>月<sup>ニ</sup>扶持米六千五百石宛入積<sup>リ</sup>也、但老人<sup>ニ</sup>五合<sup>ツ</sup>ニして女子共<sup>ハ</sup>右之積<sup>リ</sup>程<sup>ハ</sup>入不申候<sup>ニ</sup>付、老<sup>ケ</sup>月<sup>ニ</sup>四千五百石<sup>ツ</sup>之積<sup>リ</sup>、惣五合扶持<sup>ニ</sup>すれば一日<sup>ニ</sup>貳百五十石、俵<sup>ニ</sup>六六百八拾三俵也、

とあって、当時の長崎の人口（4万700人）やその頃の米一俵は平均3斗だったこと（しかし寛宝日記同年条によると実際には2.5～5.3斗の幅があったようだが）のほか、両記事を総合すればその時の米価は不作にも拘らず銀1匁で18,147×3斗÷312,199.6≒1升8合ほど買えるぐらいだったこと（但し相場はもう少し高かったというが）、あるいは回着した米高は全部で18,147÷683≒26日、すなわち約1ヶ月分だったことなど、色々と分かって興味深い。しかしともあれ、これによって多額の出費を強いられたとなれば、このころ新たな石橋の建造にまで手を延ばす余裕がなかったろうことは、十分認められるであろう。

次いで、寛宝日記によれば、

一 万治二年亥<sup>ノ</sup>五月二日夜、長崎一<sup>ノ</sup>瀬口三日市村より火事出来、村中不残焼失、火事以後家立申儀御法度<sup>ニ</sup>被仰付畑<sup>ニ</sup>罷成申候

とあり、また翌年には、

一 同〔万治三年〕子<sup>ノ</sup>十一月十二日之夜、本興善町坂本助市所より火事出来、本興善町豊後町引地町酒屋町袋町、本興善町<sup>ハ</sup>山岡吉兵衛屋敷<sup>ニ</sup>而焼留<sup>リ</sup>申候、新町<sup>ハ</sup>対馬屋之屋敷<sup>ニ</sup>而焼留<sup>リ</sup>申候、袋町<sup>ハ</sup>橋際迄、酒屋町<sup>ノ</sup>村田伊兵衛屋敷表計<sup>ニ</sup>而留申候、夜<sup>ル</sup>之八<sup>ツ</sup>時分より六<sup>ツ</sup>半迄焼申候事

といった記事も見える。とりわけ後条に記す火事は、約5時間も燃え続けたというかなりの規模であったようだが、上引傍点を付したところからすれば、袋町の橋はすでに石橋だったからこそ、そこで延焼が食い止められたともみなされるであろうか。

さて、こうしていよいよ寛文年間に入るわけだが、その元年（1661）6月27日の大水で本紺屋町の橋すなわち古川橋が崩落したことは、既に第6節で見たとお

りである。即ちこれは、先に推定したのが正しいとすれば、長崎のアーチ石橋では最初の被災となるわけである。ただし恐らくこの場合は、他の橋には全く被害が無かつたらしいことからしても、その崩落の仕方は意外に軽く、部材の全面的な流失までには到らなかったと考えられるであろうか。あるいはその位置がもともと埋立て地であることからくる地盤の悪さとか、兩岸部の基礎工事の不良といったことが原因だったか、と疑われなくもない。だがいずれにせよ、上引のように前年の火事では隣町の袋町が焼け出されており、そしてここにいたってともあれ古川橋が陥落した程であるから、当然兩岸の町々も最低床下浸水程度の被害はあったとみれよう。したがって直ちにその橋の再建がおぼつかなかったろうことは、容易に推測されるところであろう。

しかしながら不運はこれにとどまるものでは勿論なかった。すなわち続いて翌2年の正月から3月末にかけて、市中は痘瘡（天然痘）の流行といういかにも貿易港らしい病魔に襲われることになる。増補長崎略史の年表によれば「市中死者2,318人」というから、当時の人口の約20分の1の人が亡くなったわけである。特にそれは嬰兒の夭折が多かったため、同年の7月15日にはその追福のため無縁塔（法華経塔）一基が一の瀬に建立されて、今に残る（市指定有形文化財）。

そしてそうこうするうちに、遂に寛文3年（1663）の3月8日には、長崎の町は文字通り空前絶後の大火に相遇することになる。寛宝日記の関連諸記事の筆頭に、

一 寛文三年卯三月八日昼時分、筑後町樋口惣右衛門乱気<sup>ニ</sup>罷成自分家<sup>ニ</sup>火を付申候、折節風はけしく大火事<sup>ニ</sup>罷成候、同九日之朝五<sup>ツ</sup>時迄消申候、長崎中両御政所も焼失仕候、

とあったごとく、まことに瑣細な原因で、しかし結果としては折からの烈風にも煽られて、約20時間も延々と燃え続けたという大災害となってしまったわけである。

この大火については、寛宝日記以下諸史料に多くの記述がなされているが、ここはこれを主題とするところではないので、もはや詳しく論及することはしない。ただ、たとえば同じく寛宝日記によると、

焼失之町数六拾三町  
間数老万三千七百五拾七間貳尺三寸

(中略)

焼失之家数合貳千九百拾六

とあり、また他方、

焼残町合九町、此間数千五百七拾貳間五尺寸寸、

(中略) 焼残家数三百六拾五

とあることからすれば、その被災の範囲は町数にしても家数にしても約9割となり、さらにこのほか周縁部の社寺を加えねばならないから、その被害の甚大さはまことに筆絶しがたいものだったということは、改めて留意しておきたいところである。つまりその結果、市街と社寺の復興のためには当然多額の費用を要したであろうし、事実公儀よりは銀2千貫目(金にすれば3万3千両余り)という大金の貸付を受けていたから、その返済だけでもまた多年の期日を費したに違いないということである<sup>3)</sup>。したがって新しく石橋を架造することなどは、当分の間——とは言え、それが存外に短期間だったことは後述する通りだが——とても着手できる状態になかったと推量されよう。がしかし、一方そのようにして殆ど丸焼けとなった市中にあって、周辺部の焼残った16ヶ所の社寺(たとえば諏訪社、清水寺、皓台寺、福濟寺、崇福寺など)や火元に隣接しながら恐らく風向きのせいで比較的被害の少なかった市北西部の町々、それに類焼からかろうじて免れた今町、金屋町、出島町の家々などと共に、川筋にあってはそれ以前に架設された石橋だけが、その焼野原の真只中に雄姿をとどめていただろうと想像される。すなわちその光景は、まだそこここに遺存していたと考えられる木製廊橋やふつうの板橋が恐らく全焼に近い状態だったろうことと比較して、石造橋の堅牢さを改めて認識せしめることとなったに違いあるまい。換言すれば、先にも指摘したように、これ以降長崎の市中に建造される橋は、屋根つきの廊橋という形式は全く採られず、その多くが石造アーチ橋として再建もしくは創架されてゆくのだが、その直接的な契機はここにあったとみてよからうということである。

加えていまひとつ、この大火に関連して注目しておきたいのは、これ以降の復興過程において長崎の町ではその他にも火災に対する防備性を高めるための重要な処置が講ぜられていた、という点である<sup>2)</sup>。すなわちその第一は、港草の巻第九「長崎炎焼」の項に、この寛文3年の大火による被害状況を摘記したあと、

其後町家ヲ作ルニ、旧ハ町幅狭クシテ通行不自由ニヨリ、通り筋ノ町々ハ町幅四間トシ、其他ハ幅三

間、溝ノ幅一尺五寸トノ御定メアリテ家ヲ建テシト也

と記していたように、この時点で市中街区の改良がなされていたこと<sup>3)</sup>、そして第二には、早くも4年後の寛文7年にのちに「倉田水樋」と呼ばれる上水道の新設工事が着工されていた(竣工は延宝元年ということである。後者の直接の目的はもちろん飲料用であろうが、しかしその着工時期からみれば、享和2年の市中明細帳に、

本川筋馬場郷之内銭屋川にて弐ヶ所之出水をよせ、堰上ケ夫より市中三拾八町へ水樋にて引分香水二用、而<sup>レ</sup>出火有<sup>レ</sup>之節者、枝樋之水樋を塞キ一<sup>レ</sup>流にて火災を防<sup>ク</sup>用水とす。但御運上銀拾枚納之。(下略)

とあった、その消防施設としての機能も当初から設定されていたに違ひなからう。とは言え、寛文末頃の屏風絵によれば、瓦葺の町屋は——出島町を別にすれば——土蔵以外ではまだ散見される程度であったから、個々の建築物の耐火性能を十分高めるまでには到っていなかったようであるが……。<sup>4)</sup>

しかしともあれ上述のごとき状況にあっては、新たな橋の架設に際して石造を旨としたであろうこと、したがってこれ以降しばらくして再び石橋の建設が活発になるその理由は、十分了解しうるところとなりえたであろう。そして実は、上述のように大火後わずか4年にして倉田水樋という新規な都市施設が着工にこぎつけていたことや、寛文末頃の屏風絵にあっては町はほぼ完璧に再興されていたことから推察できようことに、町自体の復旧は——興福寺などでは延宝年間から最終的には元禄末頃までかかっていたようだが——意外に早く成し遂げられていたようであった。たとえば、先にも指摘したように、浜町の大橋は図志や古今集覧所引志稿に「寛文初廃」とあったのは、おそらく上述の大火でそれ以前からの「廊橋」——これが寛永9年6月の創架で、正保4年6月の洪水で半ばより折れたが、その後再び廊橋として修復されていたであろうことは、既述したとおりである——が焼失した結果、その位置の需要性の高さからして直ちにふつうの板橋でもって再架されたものとみなされる。これなどはまさに、その最も早い一例であろう。むしろこの橋が、たとえば古今集覧に、

凡市間往来ノ筋多シトイヘドモ、此大橋筋ヨリ多キハナシ、昼夜橋上人織ルガ如シ

と記されるほどの使用頻度でありながら、続けては、



故ニ破損度<sup>テ</sup>改メ架スル事も最多シ  
といわれるごとく、その後も度々更架されながら遂に石造アーチ橋とはならなかったのは、下流側の長久橋の場合も同様であろうが、その地点における川幅の若干の拡がりもさることながら、恐らくは地盤の悪さが第一に懸念されてのことだったかと推測される。

#### ⑩榎津橋——寛文6年(1666)

さて寛文3年の大火後、家々の復旧再建もほぼ一段落したかと思われる寛文6年には、早くも榎津橋が建造されていた。この橋が古くからの廊橋であり、そして正保4年6月の洪水にも無事だったろうことは、先に説いた通りである(第2節参照)。しかし上述の大橋と同様、やはり寛文3年の大火で焼失し、その結果としての再架だったと考えられるであろう。図志には、

在材木街、寛文六年建、旧為廊橋

と記すのみであったが、古今集覧所引の志稿にはほぼ同文ながら

在<sub>二</sub>材木町<sub>一</sub>、旧造<sub>二</sub>廊橋<sub>一</sub>於此<sub>二</sub>、寛文六年改建

とやや詳しく説明する所以かと思われる。そしてこの石橋が誰の喜捨による架造だったかについては諸史料ともに何ら記録するところではなかったが、夙に渡辺庫輔氏が、そして近年では宮田安氏によって何高材であろうと推定されたこと、既に言及したとおりである。特に両氏ともに論拠とされたごとく、唐僧伯巖禪師の聴月集に、

同<sub>レ</sub>榎<sub>二</sub>聖壽禪林<sub>一</sub>請<sub>二</sub>我<sub>レ</sub>先師<sub>一</sub>開法廬至造<sub>二</sub>百尺橋<sub>一</sub>建<sub>二</sub>清水寺<sub>一</sub>……

とあった点は、その年次的な順序からしても両氏の推定の妥当性を著しく高めていると判断される。加えてその前年には「永年連れ添った日本人の妻を失った」<sup>9)</sup>こと、したがってこの架橋はその夫人の供養の意も想定されようこと、そして何高材の本宅は当該橋の袂の材木町にあったということ、これらもその推定を傍証するに十分といえよう。それに上述のごとき大火後の状況からすれば、それが仮に何高材の一手寄進でなかったにせよ、その時点で石橋建設に踏み出せるほど財力という点からして、中国人——それも橋の位置からすれば崇福寺ゆかりの人々——に求めるほかはな

いと考えられる。そして事実、何高材は大火後一年余を経た寛文4年の夏には宇治黄檗山に上っていたから、延焼した彼の本宅は多分それ以前に修復されており、従ってその2年後には引続いて石橋を喜捨する余裕もすでにありえたかと推量されるのであった。

ところで、上に清水寺のことが出たついでに一言付加えておくならば、何高材〔並びにその子兆晋〕によるその本堂改建について、古今集覧には、

- ・志稿云、……寛文八年、何高材相<sub>二</sub>賞<sub>一</sub>重建<sub>二</sub>、
- ・図志云、……寛文八年、明寓客何高材<sub>二</sub>重修<sub>一</sub>、

と記していたことが改めて注意されようかと思う。というのは上引によれば、それぞれにいう「重建」も「重修」も全く同一の事態を指していたのであるから、歴史的な建築用語として両者が同義だったことがここに証示されよう。そしてそうとすれば、これは先に推考したように、眼鏡橋における「慶安元年、平戸氏重修」が、通説のごとくに「重ねて補修する」とか「重き修理」だったのではなく、まさに「重ねて建つ」の意に他ならなかったことが具体的に例証されるからである。また加うるに、図志や志稿においてこの場合逆に「重建」という用語がなされていなかったのは、直前の一句に「寛永十一年興福寺僧、如定、創建」(図志)などとあった結果、同一文字の連続的な重複使用を避けるという漢文の常套的手法に従ってまでであろうことも、推察されるであろう。すなわちこの点は、「修」字に拘泥して既往の通説に固執する必要は何らないこと、したがって先に提示した私見を一層補強しようと思われるので、敢えてここに補足説明を加えた次第である。

さて、従來說かれていたところでは、上にみた寛文6年の榎津橋のあと、次の石橋建造は同13年の東新橋までとぶことになるのだが、しかし私見では前に指摘したように(第6節参照)、古川橋の再架は延宝7年(1679)でなく、むしろ12年前の寛文7年(1667)の可能性が高いかと考えられた。そしてこの点は、上に見てきたような寛文3年の大火以降の動向、特に前年の寛文6年に一つ下流側の榎津橋が石橋として再架されていたこと、しかもそれが当時の崇福寺四大檀越の一人、何高材によるものだったとみなされることからして、一層納得されやすいものとなったのではなからうか。すなわち古川橋の更架は、時期は別にして同じくその四大檀越の一人だった魏之琰によるとされてい

たが、これはむしろこの時点にこそ相応しいかと思われるようからである。つまり榎津橋と同様、この古川橋もまた崇福寺への道筋にあたること、古川橋が前述のように寛文元年に崩落したとすれば、それが——たとえ従来説のごとくにその時点ではまだ木橋だったにせよ——以後20年近くも放置されていたとは考え難いこと（事実、寛文末頃の屏風絵には石橋として明確に記載されていたことを想起されたい）、そして前年の何高材に刺激されての魏之琰の対抗意識もあったか、といった諸点からしてである。

こうしてともあれ古川橋の寛文7年再架が認められるとすれば、同6年から13年にかけての空白は一つ埋められたことになるが、加えて私見ではなおいくつかの事例が想定されるのではないかと考えている。というのも寛永年間や正保頃の絵図に、廊橋として描かれていた橋はやはり寛文3年の大火で悉く焼失したと推量されるが、しかしそれらの位置は廊橋という形式を採用していた程にその重要度は大きく、したがってその後も逸早く復興されていたであろうこと、そしてその際には石橋として再建されていた可能性が高いとみなされようからである。むろんこれらは、概して中島川筋に架かるほどの規模もなく、従ってその架設年代や架設者等について、史料上に詳しく記録がとどめられているわけではない。しかしたとえば、寛宝日記の寛文7年（1667）条に、

一 右同〔寛文七年〕未<sup>ノ</sup>年六月三日<sup>ニ</sup>大雨降<sup>ニ</sup>而、小川町家<sup>々</sup>大水入、床之上<sup>ニ</sup>式尺上<sup>リ</sup>申候、并後藤庄左衛門殿石垣くづれ申候、下町家式三間打ぬき申候、桜町清田安右衛門石垣崩申候、内中町之家打ぬき申候、浜之町石橋崩申候事

とあった「浜之町の石橋」は、その具体的な一例として挙示しうところであろう。この石橋は、東浜町と西浜町を結ぶ——即ち今日の観光通りとの交差点の位置で、いわゆるエゴバクなる堀割を跨いで架けられていたと考えられるものだが、古くは廊橋だったこと先に指摘したとおりである。むろんこの石橋が寛文3年以降の架造かどうかは必ずしも即断しうところではないが、しかし寛文末頃の屏風絵（特に長崎市博蔵のそれが鮮明である）には再びアーチ石橋として描かれていたから、この寛文7年以降の再々架は少なくとも疑えないからである。

また同様にして、やはり寛文末頃の屏風絵（特に神

戸市博蔵のそれ）によれば、三ノ堀には10基程度、<sup>シシ</sup>鹿解川には7～8基の小橋が描かれていて、その画面上からは木造か石造か、そして石造としてもその構造形式を判定することは難しいのだが、しかし旧廊橋だった地点のそれは多く石造であり、またその中にはアーチ形式のものも少なくなかったとみることも許されるであろう。というのは第一に、古今集覧の「橋圯道路之事」条には「小石橋」として20ヶ所余りの例があげられているが、その中のいくつかについては、例えば「新橋町紺屋町等<sup>ハ</sup>平石<sup>ニテ</sup>架するのみ也」とわざわざ注記されていたことからすれば、それでないものはアーチ石橋だったと考えてよからうからである。そして第二には、増補長崎略史の年表部、寛文12年条によれば、

此年調査、市街七十七町、竈数一万二千二百五十、人口四万二十五、造酒家百六十戸、造石三千七百八十一石余、石橋廿八、板橋六、圯橋二、<sup>6)</sup>とあって、この頃石橋が圧倒的に多かったことが知られるが、それはむろん大小取りまぜてであるにせよ、中島川筋の大石橋で以て充足することはかなわず、残余には当然小型のアーチ石橋の存在を予想せしめるだろうからである。

そこで更にやや規模の大きい石橋の例としては、鍛冶屋町から本石灰町へ渡る地点——即ちのちにいう「思案橋」をあげることができるかも知れない。正保頃の絵図によれば、ここに廊橋のあったことは既述した通りだが（第5節参照）、長崎市立博物館蔵の寛文屏風には——神戸市立博物館蔵のそれでは、丁度その部分摩滅が激しく然と確認しにくいのだが——明らかに石造アーチ橋として描かれていたからである。むろんこの思案橋については、たとえば図志に、

在打鉄街<sup>〔カヂヤマチ〕</sup>、旧構土橋、復建廊橋<sup>文録年中始立  
旧云二川口橋一</sup>

とあったごとく、諸史料ともにかって廊橋だったことは記録されていても<sup>7)</sup>、一時期にせよ石橋だったということは全く触れられていない。しかしその旧廊橋がやはり寛文3年の大火で焼失したとするならば、その後は石橋で以て再建されたという可能性は十分ありえたのではなかろうか。恐らくそれが記録上に残らなかったのは、その地点が当時はまさに「銅座川」の川口部だったゆえ、地盤も悪く水害の影響も受けやすいことから、寛文末以後かなり早い時点でその石橋は失なわれてしまい、その後はむしろ普通の板橋形式で以て更



架され続けてきたからだろう、と推察される。それはあたかも、その木造の思案橋が明治7年の火災で一部を焼失し、翌8年には再び石造アーチ橋として改築されたこと、そしてこの石橋は大正3年に鉄筋コンクリート製に架替えられるまでその姿をとどめていたのだが<sup>8)</sup>、第二次大戦後銅座川の暗渠化にともない橋そのものが消滅してしまった現状では、もはやその明治の石橋でさえ人々の記憶から完全に遠去かりつつあるのと、やや近いといえようか。

### ⑪東新橋——寛文13年(1673)

以上にみてきた寛文6年の榎津橋以降の諸橋は、いづれにせよ寛文3年の大火後のいわば修復・再建工事という性格が顕著だったのに対し、寛文年間も末期に到るとようやくそれとは直接無関係な、それまで橋の無かった地点における新たな架橋という事態を迎える。

すなわちその一つは、寛文12年(1672)12月竣工(図志によれば同月26日渡初)の長久橋で、寛宝日記に、

一 右同〔寛文〕十二子年十一月より、築町と築地之間<sup>ニ</sup>橋御免被成掛候、十二月中<sup>ニ</sup>成就仕候、橋肝煎之人数博多屋清右衛門頭<sup>ニ</sup>仕候、忠左衛門様銀拾枚御出被成候、橋之名長久橋と申候

とあるのがそれである。この橋について、たとえば古今集覧に、

志稿云、在<sup>ニ</sup>十五橋之次<sup>一</sup>、初名豊後橋、寛永中島原守板倉豊後守重政建、因名、延宝元年重建とあったのは誤まりで、ここにいう寛永年間創建の豊後橋とはおそらくこの長久橋の西側、三ノ堀の川口部に架かっていた廊橋(正保長崎図によれば板橋)のことかと推測されること、したがって「延宝元年重建」とするのは年時的にも、事態としても従意しうものでないことは、既に示唆したとおりである(註6-9参照)。つまりこの長久橋はあくまで寛文12年末時点での創架と考えるべきものであったわけだが<sup>9)</sup>、同時にそれがその当初から板橋であったことは、前述来の屏風絵によって直ちに確認されるところであった。しかも上引の寛宝日記条文中に「忠左衛門様」とあったのは、第23代長崎奉行牛込忠左衛門勝登<sup>かつなり</sup>にほかならないが、その奉行が銀10枚を酬金していたことからすれば、この橋は名目上は博多屋清右衛門を世話役代表とするものだったにせよ、実質は奉行の主導下に架設されたと推定して誤まりないと思われる。というのも、実は

享和2年(1802)の市中明細帳によれば、

是〔長久橋〕者、……百三十拾老年以前、諸役所<sup>并</sup>諸役人五ヶ所商人中ヨリ架渡申候、

とあって、ほぼそのことが——年時的には完全に——追認されようからである。とすれば、おそらくそういう奉行による創架ということが、上引志稿のごとき誤伝を生じせしめたかと考量されなくもないであろう。

がともあれこの奉行は、寛文11年5月に就任(着任は9月13日)するや否や、それまで2ヶ所の奉行所が近接してあったのを、西役所(外浦町)と立山役所(延宝元年完成)に分離することを断行し、翌12年には大きい町内を二つ(古川町は三つ)に分割して、長崎市街を総数77町(丸山・寄合・出島を含めて計80町)と定めるなど、市中の再編成に取り組んでいたから、この時点における長久橋の創建というのも恐らくはその一環として把えるべきものかと思われるのである。一層穿った見方をするならば、そのさい応分の喜捨をしていたことは、それによって市民の人望を集め、それだけ奉行の地位と権力を相対的に強化してゆこうとする幕府の統制政策——延宝4年正月に代官末次平蔵茂朝を密貿易の咎で逮捕し、巨額の財産を没収したのは、その最も象徴的な事件であろう——の具体化の一歩だったかと臆推されなくもない。もちろん現実的な必要性としては、たとえば古今集覧の「築地之事」条の江戸町の項に、

実記云、長三十間五尺八寸、平廿六間、八百壺坪六、右寛文三卯年、長崎回禄<sup>ニ</sup>付、西御奉行屋敷焼失<sup>ス</sup>、(中略)兼而狭きに因<sup>リ</sup>、隣地高木作右衛門屋鋪一ヶ所<sup>并</sup>江戸町<sup>ノ</sup>町人屋敷五ヶ所、右奉行屋敷に入て作事在<sup>リ</sup>、則爲<sup>ニ</sup>代地<sup>一</sup>浜町川筋之海を埋、五人之町人<sup>ニ</sup>給、町筋<sup>ハ</sup>浜町<sup>ニ</sup>続き、江戸町とは隔共、江戸町に給故江戸町<sup>ニ</sup>入る、(下略)

とあるように、寛文3年の大火後、奉行屋敷を拡張するため江戸町の隣地を組み込み、その代替地として浜町の川筋海側を埋立てたということ、したがって長久橋の位置での通行の需要がその時点で増加していたということは、否めないにしてもである。

さて、寛文末における新しい橋の架造例として、いまひとつあげられるのは東新橋であろう。すなわち図志によれば、

第八橋 在第七橋次、寛文十三年建

と記すのがそれである。

ただしこの橋の場合、以降の諸書でも大抵はその所在について「在新橋町」と書きかえることがあるだけで、それ以上の情報をもたらしてはくれない。つまりその架設者やより詳しい架設時期等については、今のところ一切不明というわけである。したがってここより先は全く臆測の域を出るものではないのだが、強いて可能性を探究するという観点でならば、次のような推考を重ねる余地はなおありうるのではなからうか。

すなわち、まず架設者については、すでに宮田安氏も言及されていたごとく<sup>10)</sup>、市中明細帳に、

是者……前々施主有之架置申候

と記されていたことが注意されよう。ここに「前々」とあるのは、その文意よりして創建時のことと解されるが、市中明細帳でそれと同一の記述がなされていたのは、他に一覽橋、編笠橋、大井手橋、桃溪橋、榎津橋の5橋があった。したがってこれらの例からすれば、この東新橋の場合もその創架は誰かの喜捨によっていたという点は、まず動かないと考えられる。とすれば、その寄進者は誰であったか、というのが次なる課題となるが、寛文13年という時期とこれ以前に架設された石橋の諸事例から推して、やはり中国人とみるのが至当であろう。おそらく名前が記録されていないのは、榎津橋の場合と同様、当初からそれを伏せた結果であろうし、そのことも上述をよく傍証するといえよう。しかしこれ以上となると、もはや実証性は殆ど期待されないものであるが、前年の長久橋における奉行の関わりという点からして、この橋の場合もやはり背後に奉行の意向が想定されるとしてよいならば、その中国人はしばらくのちに唐通事の双壁と並び称されたという<sup>11)</sup> 彭城仁左衛門宣義と林道栄の二人あたりが疑わしいのではあるまいか。事実、この両名は奉行牛込忠左衛門とは格別親交が深く、延宝6年(1678)には奉行からそれぞれ東閣と官梅の号をおくられてもいるほどであったからである。<sup>12)</sup>とは言え、もちろんこれは単なる一試見にすぎない。

一方、架設時期についてはやや異なった角度から推論を試みてみたい。というのは、今まで神戸市立博物館蔵の屏風絵の記載に従って、石橋としての東新橋が創建される以前、そこには板橋が架かっていたと述べてきたのだが、これはむしろ疑われてもよいのではないかと考えるからである。すなわち、それが若し記載通りの板橋だったとすると、当然寛文3年の大火以後

の創架とみなされねばならないだろうが、とすれば、どうしてこの時点でそういう新築間もない板橋を再び石橋に架替える必要があるのであろうか。あるいは逆に言って、それならば何故に当初から石橋で以て建造されなかったのか、という素朴な疑惑が生じてようからである。むろん単なる可能性だけからすれば、その板橋はもともと石橋の描き誤まりということも一応は考えられるが、しかし画面左右に連続する石橋群の中でそれのみを更殊に板橋と描くことはまず想像されないから、これは断念するよりほかはないであろう。それ故、いささか大胆な推量となるが、そこに描かれていた板橋は、もしかするとその下絵の段階では、石橋をその上に建造するために仮設された木製の台枠(支保工)だったのではないかと考えてみたいのである。実際この屏風絵では、先にも指摘したように眼鏡橋を単一スパンのアーチ橋としていたことや、浜町の大橋まで石橋としていたことなど、おそらくその絵師自身は長崎の町を実見して描いたのではなく、何らかの下絵にもとづいて制作したかということは、十分推量されうるところだったからである。したがって、もし上述のごとく理解してよいならば、この屏風絵もまた、長崎市立博物館蔵のそれと同じくイギリス船レターン号が入津していた時期(寛文13年5月25日～7月26日)かその直後、即ち寛文13年の夏から秋にかけての頃の姿を描写したと想定して、まず矛盾はないこととなる。つまりこれからすれば、東新橋の竣工は寛文13年(9月21日改元、延宝元年)の秋から初冬にかけてではなかったか、という結論が導き出されてくるというわけである。

あるいはここで一層想像を逞しくするならば、寛宝日記にも、

一 右同〔寛文十三〕丑年四月三日、隠元和尚御他界被成候由、同十三日<sup>二</sup>申来候事

と記録されていた、それより約半年前の隠元の示寂が何らかの契機を与えてはいなかったであろうか。上述の特に彭城仁左衛門すなわち劉道詮は、隠元が摂津普門寺に赴いた際、特に選ばれて通事役を勤めたほどの間柄だったことが、もしかしてここに関係しないであろうか。また彭城仁左衛門は前年の寛文12年8月には実子を失くしており、一方林道栄やその父・公琰にとっては文字通り師と仰ぐ即非禅師が前々年の5月に示寂していたから、これらの追善の意も考慮されるかも知れない。この東新橋(第八橋)の架造によって、一覽橋(第六橋)と眼鏡橋(第十橋)の丁度中間が充填さ



れ、そのぶん両側の町々が便利になったことは疑えないが、しかしそもそも何故にこの時期に、全く新たな石橋がここに需められたのかが実はよく分からない。よって如上はそれに対する一つの臆見を述べたままで、もとよりこれに固執するものではない。

なお、この橋の東岸の町が毛皮屋町から新橋町へと名を変えるのは、古賀十二郎氏の指摘によれば延宝4年(1676)から天和元年(1681)の間とされるから<sup>12)</sup>、多分この橋の創架にもとづくものと考えてよいだろう。また今日この橋をして東新橋と呼ぶのは、逆にその東に新橋町があったことに因んでの命名かと推測されるが、同時に岩原川の川口部に架かっていた新橋(本新橋)との対比も配慮されていたといえようか。

### 11. 延宝年間の架橋

寛文13年に東新橋が創架されたあと、中島川筋で次に石橋の建造が登場してくるのは延宝6年(1678)の万橋となるから、この間には約5年間の中断がある。この理由はもちろんそれまでの架橋で、中島川筋に関してはふつうの都市的スケールでみるかぎり、ほぼその必要性は充足されたということであろうが、しかし同時にこの期間前後における種々の都市改造の動きがあった点も見逃されてはなるまい。すなわち、既述したところと若干重複する点もあるが、増補長崎略史の年表と新長崎年表によって見てゆけば、次のような項目を拾うことができる。

- ・寛文12年 市街を77町とする
- ・同12月 長久橋を架す
- ・延宝元年 役所(東奉行所)を立山に移す
- ・同 倉田水樋完成
- ・同 東新橋を架す
- ・同 市内各町の堺に門をつくる
- ・同11月の頃 報時所[時之鐘]を今籠町の山手に移す
- ・延宝3年 市法会所を置く
- ・同 船番屋敷内に米蔵を置く
- ・同 沖両番所を修繕す(費銀73貫目)
- ・延宝4年 市街、海岸、河岸を埋築
- ・同 聖堂を立山に再興す
- ・同 外町の宅地を検し箇所数を定む(間口5間、奥行15間を以て一箇所とす)、村の耕地宅地を検す

- ・同11月 本新橋を架す〔延宝元年の誤りか〕
- ・延宝5年 黄檗僧鉄心 聖福寺を創立
- ・同 大波止を増築

これによれば、このころ長崎市中では着々と市街地の再編成や施設上の改変・新造がなされつつあったのがよくわかるが、就中延宝4年の項に掲げられていた埋築工事については、たとえば寛宝日記の延宝元年条に、

一 右同〔延宝元〕丑ノ十二月朔日、本下町西築町  
両海辺之築地御赦免被為成候、前々より訴訟申上  
候処ニ難有恭奉存候通御礼申上候、同七日、両町  
より立合なわばり致し御検使御覧被成候事

とあるように、実はその前後約10年間にわたって市内各所で行なわれていたところであった。その全容については港草や華蛭交易明細記(県史・史料編第四所収)などのほか、古今集覧の「築地之事」条に「実録・実記・拾芥ノ三書」を引いて詳しい。そこでいまそれを場所別に整理してみれば、次のようになる(但し数値は埋立の坪数を示し、小数点2桁以下は四捨五入した)。

#### 〈海側へ〉

- ・江戸町——150(延宝1), 26.1(延宝5, 大波止3ヶ所合計), 160(延宝8)
- ・浦五島町——7.5(延宝1)
- ・枕島町——188.7(延宝4)
- ・船津町——225.5(同上)
- ・船大工町——343.8(同上)
- ・本籠町——769.2(同上)
- ・十善寺梅ヶ崎——165(延宝8)

小計 2035.8

#### 〈岩原川の川口部入江〉

- ・恵美須町——331+39.7(寛文11), 194.4(延宝4)
- ・大黒町——65.1+50.7(延宝4)

小計 680.9

#### 〈三ノ堀及び同川口部入江〉

- ・桜町牢屋——93(寛文9)
- ・引地町——104(寛文12)
- ・内中町——88(延宝4)
- ・西築町——328.7(延宝2), 250.0(延宝4)
- ・本下町——296.6(延宝4)
- ・今下町——7.2(同上)

小計 1167.5

## 〈二ノ堀〉

- ・豊後町——35 (延宝 8)

## 〈中島川沿い〉

- ・諏訪町——46.7 (延宝 4)
- ・新橋町——59.0 (同上)
- ・中紺屋町——36.9 (同上)
- ・西浜町——740 (同上)

---

小計 882.6

## 〈鹿解川及びエゴバタ沿い〉

- ・東浜町——972.2+65.3+65.9 (延宝 4)
- ・万屋町——75.9 (同上)
- ・榎津町——40.8 (同上)
- ・東古川町——6.1 (同上、次項の重出かもしれぬ)
- ・本古川町——6.1 (同上)
- ・今鍛冶屋町——227.7 (同上)

---

小計 1460.0

見られるとおり、延宝 4 年を中心としつつも早くは寛文 9 年からはじまり、延宝 8 年まで工事は続けられていた<sup>9)</sup>。そしてこの埋立てによって生じた土地の総面積は約 6,260 坪、つまりかつての出島 (3,900 余坪) の 1.6 倍強とさして多くはないが、この場合むしろ注意すべきは、その各土地が断片的であることからくる護岸工事の総延長の膨大さの方であろう。すなわち、それには当然石垣工事を必要としようが、そのためこの間にあっては、市中の石工達は殆どこれに忙殺されていたに違いないということである。

また同時に、二ノ堀や三ノ堀といった、かつての町立て当初では多少とも武備的性格を意図して建造されたものが、たとえば内中町の場合、古今集覧に、

実記拾芥并云……右延宝四辰年、堀下涸水するにより野田元庵訴訟して屋敷とす

とあったように、既にしてそれ以前から無用の長物化していたにせよ、ここにいたってその役割が完全に放棄されていた点は、やはり看過するべきではあるまい。これはつまり、一つには長崎という町がこの時点で、その中心部にあった嘗ての城塞的性格を不用とするほどに均質化が進行していたということであろうし、それがいづれ元禄 12 年にいたって内町・外町の取扱い上の区別が撤廃されるその下地を形成していたとも言えようからである。しかし一方、そうした均質化は決して都市全体を一体化するという方向に進められたのではなく、上にも引いたとおり延宝元年には市内各町の

境界に門が新たに設置されていたというように、むしろ個々の町を分断し、それを自律的な構成単位として再組織化すべく推し進められていたわけであった。むしろこれは先述の寛文 3 年の大火後における都市改造の延長には違いないが、しかし一層直接には、幕府の統制政策を背景にして、奉行を頂点とする一つの封建都市へと変質が企てられていた、という方がその実態に近いと思われる。

## ⑫万橋——延宝 6 年 (1678)

上述した延宝 4 年を中心とする市中各所における埋築工事がほぼ落着いたとみられる延宝 6 年には、万橋が創架されることとなった。しかしこの橋の場合は、その架設にいたるいきさつがこれまでの諸橋とは大いに異なり、またその工事途中において災難が発生したこともあって、比較的詳しい記録が残されている。これについては増補長崎略史をはじめ、宮田安氏らも既に言及されてきたところであるが、ここでは重複を厭わず、いま一度その経過を辿っておくことにする。

まずその架橋の契機については、犯科帳もふれるところだったが、より内容の詳しい寛宝日記の方を口語訳して示せば、次のとおりであった。

延宝 5 年 10 月 20 日の夜、丸山町の乙名・与三兵衛〔遊女屋の主人、犯科帳では渡辺与惣兵衛と書く〕がどこかへ行って酒に酔って帰ってきたところ、家の大戸口がしまっていたので、外から開けるようにと申したが、家の者は皆すでに就寝していてあける者がいなかった。そこで〔偶々その遊女屋に泊りに来ていた〕京都の金屋喜右衛門という客の下人が起きていって戸口をあけた。しかし与三兵衛は立腹のあまり彼を自分の下人と勘違いして、散々に打ち擲じた。そこで市兵衛〔犯科帳では市平〕という名の下人はそのことを旦那 (主人) に告げたところ、今度は喜右衛門が腹を立て、取り逃さず切ってしまうと言った。もともと市兵衛は武士の家に奉公していた者であったから、心得たとばかり与三兵衛の居所へかけ入り、まっこうから切りつけた。〔与三兵衛はとっさに〕腕で受けたが、その腕首を打落し、納戸へ逃込んだのを追いかけていって、七刀目に仕留めた。〔市兵衛は直ちに〕切腹しようと思ったが、そうしては自分の死後に旦那に難儀が及ぶと思い、〔取合えずその夜は〕旦那と連立って宿へ帰った。そして翌日、奉行所へ申立てた。



与三兵衛方の女郎3人、喜右衛門、たいこもち、その他の者が証人として呼出され、喚問を受けた。まず市兵衛は〔直接手を下したため〕牢屋に収監された。丸山<sup>丸山</sup>方の申立てでは、喜右衛門が切れと言ったから〔下人は〕切ったまでで、だから喜右衛門自身を取調べて下さいというが、一方喜右衛門はそう言った覚えはないと抗弁するので、一向に埒があかなかった。そこでまず市兵衛の方を詳しく詮議して、牢屋にて成敗と決した〔犯科帳では11月16日斬罪とある〕。また喜右衛門については罰金を取立てて、〔被害者たる〕与三兵衛方へ差出すことで決裁しようとしたが、与三兵衛方では金は要らないから本人の命を取って下さい、また下人の市兵衛は助けてやってくれと申立てた。しかし与三兵衛はすでに死んでいるのだから、喜右衛門をその両成敗の相手方とするのも難しい。そこで〔両者の言い分を〕折半として東築町と本鍛冶屋町の川筋に石橋を架けさせれば、功德にもなろうと仰せつけた。それゆえ、その場所に銀10貫目余りを出して石橋を架けることとなった。

寛宝日記の当該条の全文を長々と訳出してきたのは、もちろんその話としての興白さもあるが、同時にこれによれば次のような点が明らかになろうからである。

すなわち第一には、このころ石橋を架設すること自体が功德になると観想されていたことが、ここに具体的に証示されるという点である。むろん図志以下に、「罪を贖ふて建つ」とあるのもこれに他ならない。

第二には、いずれにせよその裁定は奉行——この時もまた牛込忠左衛門だった——が下していた筈であるから、万橋の架設工事も当然奉行所の指図下に行なわれたに違いないということである。すなわちここにもまた、前述来の都市整備と同様な意図が感得されようが、恐らくその場所の選定も奉行自身の裁断によったものとみてよいだろう。むろん、すでにその当時では、中島川と直交する道路筋のうち、眼鏡橋より下流側ではもはやそこだけが空白のままに残されていた——従来の所説では、ふたつ上手の古川橋の位置がまだ石橋となっていなかったとするが、これはこの点から從意し難いのではないか——ということもあろうが、しかしその位置より下手では浜町の大橋、長久橋といずれも木製橋だったことから察せられるように、この位置での石橋の建造はもともと困難さが予想されたところだろうからである。事実、そのためでもあろうか、この橋の建設が順調でなかったことは下に見る通りで

ある。

そして第三には、この橋の架設に要した費用は銀10貫目余りだったということ、しかもこれは長崎における石橋建設でその具体的な数字が出てきた最初のものであったという点である。もとよりこの場合は、犯科帳のいうように「過料と為て」だったから、多少とも割増し請求されていたかも知れないし、また下にみるようにその工期は大幅に遅れもしていたから、その価格を以て当時の石橋一基を架設するに要する一般的な費用と即断するわけにはゆくまい。しかしながら、次に取上げるように、全く同時期の架設であった出島の石橋の場合、その規模の小ささにも拘らず銀3貫800目を要していたから、この両者よりすれば先に推定した慶安年間における標準的な石橋一基の費用おおよそ6貫目というのは、やや安く見積りすぎた嫌いをなしとはしない。寛文3年の大火をはさむ約30年間という年時的開き、つまりこの間における物価の上昇を考慮に入れても、慶安年間においては——その時に言及した5割増の9貫目とまではゆかないにしても——大体7～8貫目ぐらいだったとみておく方が適切だったかと思われる。よってこの点を補訂しておくことにしたい。

さて、万橋の架設経過については第5節でも少し言及したように、幸い寛宝日記にいくつかの記事が収録されていて、それによって跡づけることができる。すなわちその第一は次なる記事であった。

一 右同〔延宝六年戊〕午四月七日之昼、大雨ふり、新<sup>レ</sup>立申候石橋之わく打ながし申候、然共橋<sup>ニ</sup>其夜くさび打申候故くづれ不申候事

先にみたごとく下男<sup>ノ</sup>の市兵衛の処刑が行なわれたのが11月16日であったから、おそらくこの橋の工事は年末頃から準備に取掛り、2月末か3月初めには現場での石積み工事も始まっていたであろうか。ともあれ、4月7日になって大雨が降り、そのため台枠が流されてしまったというのである。しかしその夜、楔を打ったことによって橋自体の崩落はとにかく免れたというのだから、もはや拱環石はほぼ積み終っていたと考えられる。が同時に、まだ台枠があったことからすれば、左右スパンドレルの壁石を最終的に整えるまでには到っていなかったとみれよう。石橋の構築技術上から特に興味を惹かれるのは、この時に打たれた楔とはいかなるものであり、またどの位置にどのようにして打たれたのかということであろうが、残念ながら上引の

記事からはよく分からない。ただ、上述の状況からすれば、その可能性は次の二通りぐらいしか考えられないのではなからうか。すなわちその1は、拱環石はすでに頂部の要石を打込むだけのところまで出来上っていたので、その夜大急ぎで要石＝楔石かそれに代わる木片を打込んだため、下の台枠は流されたが橋自体は崩れなかった、という場合である。これは上引の記事とやや順序が逆転するが、それはむしろ叙述の仕方によると一応は考えられようからである。そしてその2は、もはや拱環石は完全に積上っており、明日にでも台枠を外せるまでに仕上っていたが、この大水によって台枠が不均衡な崩れ方をしたため、拱環石は残りはしたものの変形が生じた。そこでその夜に、拱環石の崩落を防ぐため新たに楔を打った、という場合である。

何ぶん記事内容が簡略なだけに、これ以上の推測は甚だ難しいのだが、しかし寛宝日記に収載するその1ヶ月半後の次なる記事が、この場合の考え方をある程度限定してくれるかも知れない。

一 右同午五月下旬之比、本鍛冶屋町事、町中より御理<sup>リ</sup>申上、今より万屋町と名を替申候、并石橋之名くさび橋と名付候事

まずこれ以降この橋を殊更に「くさび橋」と名付けていたことからすれば、4月7日の夜に打たれた楔の材料はおそらく木では様にならず、また石ならばどの石橋でもその頂部には楔石（要石）を打込むのであるから、この場合とりたててそう名付けられる理由は乏しいかと思われる。したがってこの場合のクサビとは鉄——そしてそれならばその形状は鼓形であろう——の可能性が最も高いのではなからうか。長崎の石橋群では、その創建当初から鉄楔を用いたことは知られるところではないから、この場合に限ってそれが打たれたとすれば、そのクサビ橋なる橋名の出てくる所以も理解しやすいのではあるまいか。そしてその鉄を扱うのは、もちろんこの橋の架かる本鍛冶屋町の職分であったに違いない<sup>2)</sup>。しかしここでは、その本来の職域を出て、石工達の領分だった架橋工事に加担することとなったため、これ以降町名を「万屋町」と呼ぶことになった、というのではないだろうか。むろんこれはすべて臆測の域を出るものではないが、しかし大雨当日の夜といえ、まだ川は増水していた筈であるから、その楔はいずれにせよ拱環石の上面から施工しうる範囲のものであろうし、また楔——それがたとえいかな

る形状のものであったにせよ——を打つことで橋本体の崩落を防ぎえたというのだから、その拱環石はやはり多少とも変形していたとみることは許されるであろう。でなければ、そもそも楔を打つ必要がないであろうし、また正常な状態にある拱環石には先の尖った楔を打込みうる隙間などあろうはずはないからである。

しかしいづれにせよそうした甲斐もなくというべきか、それより更に半月余りして再び大水となり、遂にこの石橋は崩落してしまった。すなわち寛宝日記には、

一 右同午六月十八日之昼八ツ時<sup>ニ</sup>くさび橋くづれ申候、石之根を大水<sup>ニ</sup>あらいながし候<sup>ニ</sup>付、くづし申候、其後又右之通橋掛候事

と記していた。「石の根」というのは、たぶん兩岸に設けられた拱環石の基礎部分を指すのであろうが、それを大水が洗い流して橋が割れたというのは、前回の大雨のとき橋は横方向（アーチの円周外方向）に迂りを起こして形が相当扁平化していたか、もしくは兩岸部どちらかの基礎が不等に沈下するなどして、アーチがすでに異様な変形を起していたからだと考えられようか。ふつうの様態にあるアーチ構造の場合、橋全体が水中に没して下部から突き上げるほどの浮力が働くか、さもなければ拱環石の頂部付近に大木か何かが流されてきて強烈な衝撃力が加わるのでないかぎり、それが少々の水流で崩壊するとは一寸想像しがたいだろうからである。

しかしともあれ、その「くさび橋」と名付けられた石橋は——完全に竣工していたかどうかとも疑わしいが——6月18日に崩落し、その後また同様に架けなおされたというのだから、恐らくそれは年内に完工していたとみれよう。むろん図志以下の諸史料には「くさび橋」なる名は全くとどめられていなかったことからして、その再架に際してはもはや楔は使用されなかったものと解してよいだろう。

### ⑬出島橋——延宝6年（1678）4月

寛宝日記の延宝6年条には、上にみた万橋に関する三つの記事に挟まれるようにして、次なる記事が見出される。

一 右同午四月廿三日<sup>ニ</sup>出島大門立なをし申候、并町筋之板橋を石橋<sup>ニ</sup>仕なをし申候、大門銀五貫目余入申候、石橋<sup>ニ</sup>三貫八百目入申候、右<sup>ハ</sup>吉川儀



## 右衛門乙名之時

すなわちこれによれば、延宝6年の4月23日、出島の江戸町側に面した大門（表門）が改築され、同時にその前の橋が板橋から石橋へと改築されたというのである。この石橋の寸法は、『通航一覧』巻244には「長さ二間二尺、横幅二間一尺」とあり、寛政10年（1798）写の「出嶋新絵図」<sup>3)</sup>では逆に「堅二間一尺、横二間二尺」とあり、また増補長崎略史の橋梁志には「長二間五合、幅二間五合」とあるが、いずれにせよそれは当初からタテヨコともに14～15尺（前二者の1間は6.5尺で、後者のそれは6尺であろうゆえ、ほぼ一致する）という規模の小ささであったとみれよう。一方、大門はやはり上と同じ絵図によれば、間口7間半で奥行2間半というこれまたさして規模の大きくない建物であった。しかしその大門の方が、石橋に比べて約5割増しの費用がかかっていたというのだから、大門はおそらく本瓦葺きであり、またその木材も良質の大材が使われていたにせよ、当時の長崎における石橋の価格の安さの方が改めて注目されるところといえようか。またこの橋は、板橋であった時分には幾度か腐朽のたびに架け替えられてきたと想像されるが、同じく寛宝日記によれば、

一 右同〔延宝四年〕辰六月廿四日、江戸町大波戸井出島、右両所之御制札之垣、前々<sup>々</sup>は木垣<sup>二</sup>而<sup>有</sup>之候を、忠左衛門様切石<sup>二</sup>而<sup>未</sup>代物<sup>二</sup>被成候事とあるのと同様、ここに到って恒久的な堅牢さが期待される石造に替えられたものと見做されよう。

ところで、論題が出島の橋と表門に及んだついでに、一点補足を新たに加えておきたいことがある。それは内町と外町が赤・白で色別けされたいわゆる寛永長崎図について、先にその原図の成立年代としては寛永9～10年頃とし、図中の記載では特に出島と眼鏡橋の二ヶ所が後補としてよいのではないかと推定したが、このうち出島については——その時に若干の論拠を呈示したが——ほぼ確証が得られたという点である。すなわちその絵図によれば、出島の表門は橋を渡った向こう側、つまり出島の方に描かれていたのだが、しかしその表門がその位置に建てられるようになったのは、寛永19年の3月前後だということが分かったからである。そしてそれはやはりオランダ商館日記の次の記事にもとづく。<sup>4)</sup>

1942年3月15日〔寛永19年2月15日〕

天気好く、北の風、緑羅紗一反、黄羅紗一反を贈つて旅行〔江戸参府〕の報告をする為め、正午頃許可を得て奉行三郎左衛門殿の邸に行つた。〔中略〕市に出る島の橋は取除いて新に架橋し、番屋（町の方に在つた）は島内に移すことゝなつた。〔中略〕それで我等は束縛され、商人及び市民は島に来ることも、又通詞と同席でなければ我等と語ることも許されず、門には昼夜番人が置かれた。

むろんこれのみではまだ不明瞭だが、2日後（3月17日）の記事には次のようにあって、決定的となる。

（奉行の名で）オランダ人一同番屋即ち市に出る門の側に在る一軒の家に移り、船の着くまで同所に居ることを命ぜられたが、我等は大に反対し島全体と諸建物に対して多額の借賃を払つてゐるに拘らず、欲する所に住むことを許されず、畜類を置くに適したる廃屋に移ることを強制されるのは不法である。他の家屋は（会社の費用で）適当なる戸及び窓を附けた故此命に従ふことは出来ぬ。〔以下略〕

つまりこれによれば、商館長の江戸参府中に、出島の「監獄」性を一層強めるためであろうか、その番屋とともに表門が橋の手前の江戸町側から出島の中へと移築されたことが判明しようからであった。そして実は、加うるにいま一方の寛永長崎図——これはむしろ「正保長崎図」と呼ぶに相応しいかは先に説いたところだが——と往古長崎図には、これ以前の状態が描写されていたのであった。すなわちこの両図の場合<sup>5)</sup>、その表門はまさしく江戸町の側に描かれていたのだが、これによって上述の寛永長崎図の方における出島は、少なくとも寛永19年以降の補筆であることが立証されるというわけである。そして同時に、後者の両図に描く出島とは、恐らく現在知られるかぎりでの出島図の中では最古のものとなり、したがって最初期の出島の姿を考えるに際しては、第一に参看すべき貴重さをもつということにもなるのであった。<sup>6)</sup>

## ⑭桃溪橋——延宝7年（1679）11月〔図11-1〕

延宝6年の万橋に次いで、従来は同7年に魏之琰によって古川橋が初めて石橋として架造されたと説かれていたが、しかしこれが従意しえないだろうことは既に幾度となく言及してきたところであるので、ここではもはや繰返さない。したがって私見では、万橋に続

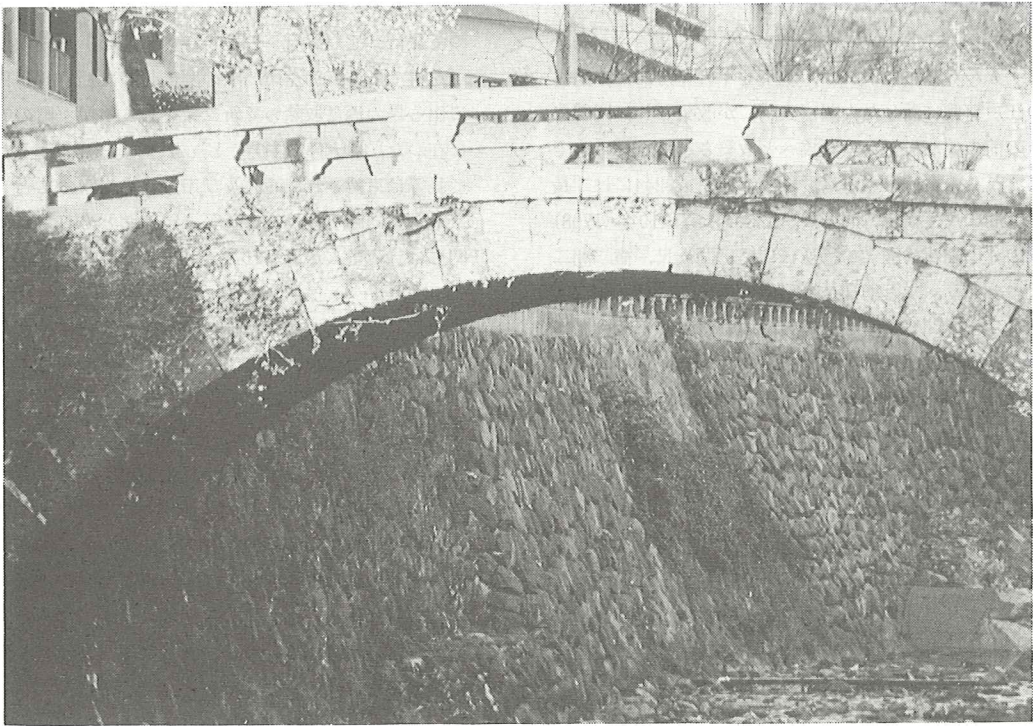


図11-1. 桃溪橋（下流側，水害前）

く中島川筋での石橋の建造は、同7年の桃溪橋だということになる。図志の記載を引けば、次のとおりである。

桃溪橋 在堂門橋下，古溪畔桃樹，因名，銘曰，  
延宝七年己未仲冬，狂僧卜意募十方檀越建造，傍  
奉石像大士，季夏致供，俗曰卜意橋

この記事の中、「狂僧卜意」とあるのは、その橋の下流側右岸寄りのスパンドレルに嵌め込まれていた銘板にはそうになっていなかったこと、既に宮田安氏の指摘されたところである<sup>7)</sup>。即ちその銘板には、次のようにあった。

長崎僧卜意募  
十方之諸檀越  
建造石橋済津  
功德無量矣  
(時)  
山  
(七)  
延宝 柒 歳次己未  
仲冬吉旦書

( ) 内は通用の文字を示す

見られるとおり、ここには単に「長崎僧」とあるのみで「狂僧」とは書いていなかったこと、したがって港草や名勝図絵も同じくそう記すのは、「現地調査をしないで本の転写をかきねていったと見るほかはない」こと、そしてたとえ「狂僧」とあっても——それは図志の著者による文飾とみるべき程のもので——「ほんとうの気持ちがいにしなくてもいい」こと、いずれもまた宮田氏の既に説かれた通りであろう。

宮田氏が県立図書館の渡辺文庫にある永島氏文書にもとづいて紹介されているところによれば、僧卜意は帰化四世にあたる中国系の日本人で、本名は永島仁左衛門卜意(卜意は字、名は動意<sup>きんそく</sup>)といい、晩年僧となったがこの石橋を架設したときはすでに77歳だったという。しかしいずれにせよ、この場合もまたその銘板に「十方の諸檀越に募って」とあったごとく、この架橋は卜意の一手寄進だったのではなく、実質は中国系の人々が多くの喜捨をしたとみて大過あるまい。ただ、この橋と大手橋との近さからすれば、何故にこの時期にこの位置に石橋か、という点はやや疑念がもたれる。それ故、おそらくその点に、銘板に刻まれていたよう



な「津を済す功德は量りしれない」という意識を、その頃ト意に抱かしめる何かがあったかと臆推されなくもない。図志に「傍に石像大士を奉った」といい、名勝図絵では「傍に一小堂を構へ、石地藏を置く、俗に称してト意地藏と云」と記していたことが、一層その思いを強くさせるのではなからうか。むろんその当時は多分その兩岸ともに出来大工町だったと考えられ、またト意は2年前の延宝5年には「もものき川兩岸に石垣をつくる」という事績を重ねていたことからして、自身その町内に居住していたかとも推測され<sup>8)</sup>、したがって自らの近辺の環境整備の一環でもあっただろうとしてもである。あるいは寛宝日記の延宝8年条には、

一 右同〔延宝八年〕申年、諏訪之散敷之あたり見苦敷候間石垣を築、きれい<sup>ニ</sup>可仕由被仰付、則二月中旬之比より石垣築申候、并大門矢五郎殿御すへ被成候、又天満宮社壇拝殿座敷皆御立被成候、殊外両社結構<sup>ニ</sup>罷成候事、右は牛込忠左衛門様御代

一 右同申年、一ノ瀬桜馬場長崎入口殊外見苦敷候条、二本杉之庄屋之本より大工町門きわ迄、石垣練堀被成候事、右同断

といった記事が見え、またもや奉行牛込忠左衛門の指揮下に長崎街道周辺が整備されていたようであるから、この一環としての意味もあったのかもしれない。

なお、図志にいう石像大士、名勝図絵にいう石地藏は、現在近くの光雲寺本堂前の階段踊り場に置かれていて、その台座によれば図志の記事中にあった「季夏」とは、翌8年のことであったのが確かめられる。すなわち石橋の建造後、約半年してその石地藏は別に奉安されていたというわけだった。恐らくト意自身にとっては、その架橋には何らかの祈念がこめられていたのではなかったか、と推量する所以である。

#### ⑤ 芋原橋——延宝9年(1681)

延宝年間最後の架橋は、中島川の第七橋、すなわち今日いうところの<sup>すずきはら</sup>「芋原橋」となるが、しかしこれについては、図志もわずかに、

(コンヤマチ) 紺 坊、延宝九年建 ( ) 内は増補図志による

と記すだけで、以降の諸史料ともに甚だ素っ気ない。

この橋の位置は、明暦3年架設の一覧橋(第六橋)と寛文13年の東新橋(第八橋)との中間で、それまで空白のままに置かれていたと思われるところである。

架設者の名前が残されていないことと、これまでの諸例からすれば、なおこの橋までは中国人の喜捨によるかと一応は想像されるが、確証は全くない。あるいはこの橋の場合、その兩岸はともに中紺屋町と今紺屋町であり、この両町は寛文12年に分かれてできたものであったから、もともとは同一町内ということで、特に両町より架設が要望されたかと推測されなくはない。そしてそうとすれば、市中明細帳に、

是者前々掛り両町より拝借銀相願架置申候

とあったのは、その「前々」という書きぶりからして、享保6年の洪水後の再架時ということではなく、むしろその創架時の事情を示すものと解されないだろうか。つまり前述の出来大工町内に架かる桃溪橋といい、この芋原橋というのは、時期的にはそれ以前の諸橋と下にみる元禄年間架設の数橋とのあいだに位置するごとく、それは架設者の点でも両者間における過渡的形態をとっていたのではないかと考えられなくはないからである。むろん詳しくは後考を俟つことにしたい。

なお、この橋の名<sup>すずきはら</sup>「芋原」の由来については、「芋」字の義(草が盛んに生い茂ったさま)やススキというこの場合の訓みからして、昔このあたりには薄<sup>せんせん</sup>草が芋々として生えていたという光景が想定される向きが強い。しかし西道仙がこれを命名した明治15年当時に、この橋に限ってそうした情景であったかどうかはいささか疑わしい。それ故この点は、『長崎縁起略』<sup>9)</sup>に、

正覚寺ハ……其後今(の)延命寺下之辺りに<sup>すずきはら</sup>薄原と云<sup>所</sup>に移り……

とある、この橋の左岸付近の古地名にもとづくとする方が適切かと思われる。むろん何故に「芋」といった余り慣用的でない文字を当てたかは分からないが、丁度「伊勢町」の古名「新高麗町」に因んで第二橋を「高麗橋」と名付けていたようにである。

さて以上にみてきた延宝年間架設の諸橋に関する省察を終えるに当たって、丁度適切な資料が寛宝日記に収載されているので、最後にそれを見ておくことにしよう。すなわちそれは延宝9年(9月改元、天和元年)時点での市勢調査報告の記録というべきものであるが、そこには人口以下実に様々な項目が列挙されており、その一つとして「橋数」が掲げられていた。次なる記事がそれである。

一 右同〔天和元〕酉年、長崎中人数・竈数・寺社数・橋数・惣家ヶ所数・田畠・酒屋数・諸役人役料 御上使様<sup>江</sup>書上上申写

(中略)

一 橋数三拾之内 大拾四内<sup>石十<sup>フ</sup>板四<sup>ッ</sup></sup> 小拾六内<sup>石七<sup>ッ</sup>板九<sup>ッ</sup></sup>  
(以下略)

ここにいう橋数のうち、「小拾六」というのはもとよりどれと特定しうるものではないが、一方の「大拾四」というのがこれまでの考察と矛盾しないかどうか、これを一応みておくことにしたい。

まず、大きい橋のうち板橋の四つは、浜町の大橋、長久橋、それに前引したごとく増補長崎略史の年表では「延宝4月11日架す」とあったが、図志には「延宝元年九月廿日渡初」と割注記されていた「新橋」<sup>10)</sup>(本新橋)が、いずれにせよ確実であろう。したがって残るは一つとなるが、市中で規模の大きい板橋となれば、思案橋をあげておくのが穏当かと思われる。すなわち先には、それは寛文末頃、一時期石橋ではなかったかとしたが、確証はないもののその石橋はおそらくこれ以前に崩落し、ふつうの板橋に架替えられていたのではないかと考えての上で、である。

他方、10基の大石橋の選定には若干迷いもあるが、いままでにみてきた諸橋の中、⑦一瀬橋と⑧中川橋はその規模に関わらず市外ということで除外されようし、⑬出島橋は規模の小ささからしてたぶんこれに含めるわけにはゆかない。そしてまた、⑤玉帯橋もやや規模が小さいか、又は市中でないと考えてよいならば、一応外しておいてよいであろうか。とすればこの調査が何月時点でのものかが問題となるが、もしその時にまだ⑮芋原橋が未完成だったとするならば、丁度残余は10橋を数えることができることとなる。すなわち、①眼鏡橋、②袋橋、③古川橋、④大手橋、⑥高麗橋、⑨一覽橋、⑩津津橋、⑪東新橋、⑫万橋、⑭桃溪橋の以上10基である。

因みにこの時の人口は、同記事によれば52,702人で、前にみた寛文12年より1万人以上増加していたことがわかる。延宝4年前後の埋築工事の結果ということもあろうが、とにかくそれだけ市中の人口密度が高くなったことは疑えないであろうから、当然その往来も一層活発化し、まだ空白のままに放置されていた川と直交する町筋での架橋に対する要望には、更なる拍車

がかけられていったと予想されよう。

## 12. 中島川石橋群の完成

延宝9年(1681)に芋原橋が架設されたあと、次に中島川筋で石橋が新造されるのは、天和・貞享年間(1681~1687)を経て、元禄3年(1690)の阿弥陀橋となるから、この間には9ヶ年というやや長い中断が再び訪れている。これは、前節末尾に述べたようなこの頃の人口の急増、したがって架橋への要望が次等が高まっていただろうということと一見矛盾するようだが、しかしこの場合もまた、それなりの歴史的な理由を辿ることができる。

すなわちまず延宝9年=天和元年と翌2年(1682)は2年連続の飢饉となり、福濟寺や崇福寺では連日施粥を行なって救済活動に乗り出していたが、餓死者が多数出たといわれる。現在崇福寺境内に残る「深サ5尺7寸、口指渡シ六尺1寸1歩、重サ1,965斤」(港草)の大釜は、この天和2年時の施粥に用いられたものであることは、よく知られているところである。

また同じく天和2年の3月には、寛宝日記に、

一 右同〔天和二年〕戌三月廿四之夜より大雨ふり、同廿六之夜迄ふり続申候、大川筋借屋水車屋ながれ申候、長久橋ながれ申候、并船大工町峯くづれ男女式人相果申候、山下<sup>二</sup>作<sup>リ</sup>申候麦皆ながれ申候、小川町家之内<sup>江</sup>水入申候、右之雨近国<sup>江</sup>ふり不申候由其後聞<sup>江</sup>申候事

とあるような、いわば局所的な集中豪雨禍にも遭遇していた。長久橋は寛文12年12月の創架であったから、20年に満たずして第一回目の被災となっていたわけである。

市中がこういう状況にあったから、この天和2年から貞享元年(1684)にかけては中国貿易も振わず、したがって経済的にも苦境に立たされていたとみられる。貞享2年以降は逆に中国船の来航が急増するのだが、しかし幕府は貿易の統制を強めるため同年正月には定<sup>じよう</sup>高貿易法を發布して、貿易額の総量規制(中国船による貿易高を年に銀6,000貫、オランダ船はその半分)に踏み切っていた。むろんこれは裏での密貿易を誘発するわけだが、貞享2年8月にはそれを防止する目的で唐人倉庫を封印したり、同4年8月には密輸入品を大波止で焼き捨てるなどして、その姿勢を貫こうとした。加えて天和3年(1681)2月には、町々に御触れを出して、祭礼や法事の簡素化、華美な衣服の制限、町人



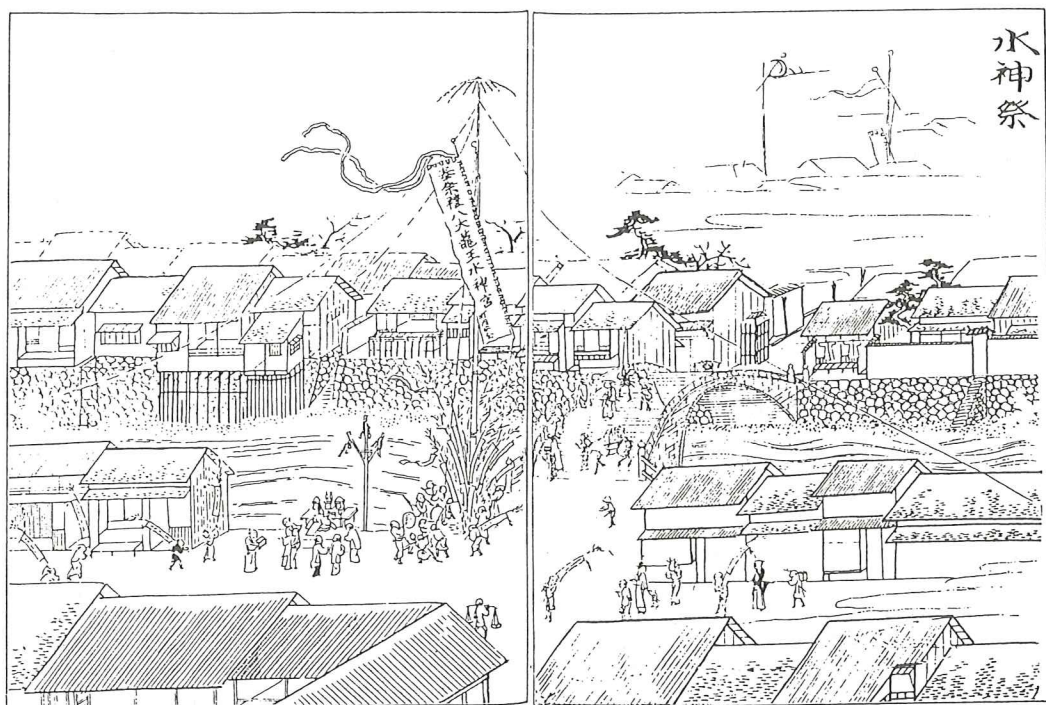


図12-1.「水神祭」の図に描かれた阿弥陀橋（『長崎古今集覧名勝図絵』刊本より転載）

の帯刀の禁止等を命じていた（寛宝日記）。そして遂に元禄元年（1688）には、唐人の市中雑居を禁止し、来航の唐人は悉くその中に収容せしめるための唐人屋敷の建設（完成は翌2年4月）へと歩を進めていたのである。

以下、その後の元禄年間に架造された5橋について順次見てゆくことにするが、これらの場合には、図志の成書年代との開きも少ないせいであろうか、その記事には殆ど疑うべきところもなく、また既に説かれている事柄に付言すべきほどのことも余り見出されない。よってここでは、各橋のそれぞれについて図志の記事を示し、それに簡略な説明を加えるかたちで、一先ずその全体の経緯を眺めておくことにする。

#### ⑯阿弥陀橋——元禄3年（1690）11月

第一橋 在鎮治東、旁奉彌陀仏像、名為極楽橋、  
元禄三年十一月、園山善爾建、有銘（図志）

この橋は、万橋のような血生臭い殺人事件にからんだ例外的存在を別にすれば、生粋の民間日本人による架橋としては最初の確実なものである。以降元禄年間

の架橋はいずれも日本人に拠るから、この橋の園山善爾がその先弁をつけたことになるが、しかしもっと根本的な史的背景としては、この前年の元禄2年に唐人屋敷が完成していたことが決定的だったと考えられる。すなわちその本来の建設目的が祭辺にあったにせよ<sup>1)</sup>、結果としては唐人の市中雑居はむろんのこと、年々来航していた人々と町自体の交流が日常的には絶たれたわけだから、特定の寺院の門前橋でもないかぎり、架橋に際して唐人の檀越達に新しく寄進を求めることは、もはや正当な理由づけが難しくなったに違ひなからうからである。それにすでに住宅唐人化していた唐通事らにとっても、そうした事情であってみれば積極的な働きかけはできにくいであろうし、またこの当時ともなれば、彼らも大体二世ないし三世の世代が中心となり、すでにその職の世襲化も定着していたであろうから、殊更にいわば市民権を獲得するための一手寄進の行為に出る必要もなくなっていたとみなされようか。

なお、この橋の寄進者たる園山善爾の経歴については、光永寺境内の南隅にある同翁の碑文によって、すでに宮田安氏が紹介されている。また古今集覧名勝図絵には、かつてこの橋の近くにあった水神社〔元文

4年(1739) 爐粕町より遷移、大正9年本河内の現在地へ遷宮)の夏祭「水神祭」を描いた絵が収められており、そこにはこの石橋の反りの強い姿が見出される〔図12-1〕。

現在この橋は、明治38年に両側とも斜めに橋面が鉄筋コンクリートで増設され、欄干も全てコンクリートに変わり、また昭和43年の橋面改良で砂岩敷きとなっているが、しかし史料上にはこの橋の崩落は全く記録されていないので、その下部のアーチは創建当初のままと推考される。そしてこの橋が1982年7月23日の集中豪雨にも無事であったことは第1節に述べた通りだが、それをその後の河川改修で移転もしくは撤去を求めているというのが現状である。あと数年で300年を迎えようとする橋の堅牢さを讃えて、むしろ往時の姿に修復するというのが、この橋に対して今なすべき最も正当な処遇ではないのだろうか。それを逆にこの石橋を邪魔者扱いにする改修工事とは、一体いかなる根拠に立つものなのであろうか。筆者にはとても歴史的批判に堪えうる理論的裏付けがあるとは判断されない。時には自らが拠って立つ方法自体が、あまりにも近視眼的でないかどうか、また場合によってはもはや時代遅れの旧規にのみ従順でないかどうか、関係者はとくと再考されんことを切にお願いしておきたい。

やや余談ながら、先にその一節を引いた『江戸参府紀行』の著者ケンプエルは、元禄3年に商館医師として来崎し、元禄5年9月22日にはバタヴィアに向けて出帆していたから、彼が見た長崎の石橋とはこの阿弥陀橋までの諸橋だったこと、また一般に正保4年(1647)のポルトガル船入津に関わる「長崎港警備図」といわれて諸書に引かれている図は、延宝年間の埋築工事後に近い市街地の形状や、中島川中流域の一覧橋や東新橋は欠けているものの、すでに桃溪橋やこの阿弥陀橋が記入されているという石橋の状況からすれば、元禄年間中頃以降の作図かと推察されることを付言しておく。

#### ⑰古町橋——元禄10年(1697)12月

第五橋 在古街、元禄十年十二月、河村氏母妙了建(図志)

古今集覧所引志稿、増補図志、港草、名勝図絵はいずれも全く同文を記すが、市中明細帳には、

是者、元禄拾<sup>丁</sup><sub>丑</sub>年架、施主河村嘉兵衛、建立河

村甚右衛門母妙了、

とあって少し異なる。いずれにせよ河村氏一族の寄進とみてよいわけだが、残念ながら肝腎の河村氏については殆ど知られるところがないので、嘉兵衛と甚右衛門及びその母妙了との関係や、どのような理由での喜捨なのかがよく分からない。ただ上引明細帳の書きぶりからすれば、嘉兵衛か甚右衛門のいずれかの死を悼んで、その追善供養のために建立されたかとは、想像されるであろうか。

#### ⑱大井手橋——元禄11年(1698)11月

第三橋 在大堰街、跨<sup>〔股〕</sup>二沱溪、元禄十一年<sup>〔十一〕</sup>暢月、邑人岡正敏建、林道栄為銘(図志、但し〔 〕内は増補図志等による)

以降の諸書も同文を記していて、問題はない。ただ、次にみる魚市橋を架設した岡正恒はこの正敏の弟に当たるから、兄弟による2年続きの架橋——というよりは、魚市橋の場合、その竣工は5ヶ月後の3月だったとされるから、恐らくは2橋同時の発注で、工事が連続して行なわれたのであろうこと、そして先に完成した大井手橋の方を以て兄の寄進としたにすぎないかとは推測されよう。

なお、この橋の架設工事に入る直前かと思われる元禄11年の4月21日には、寛文3年の大火以降では最大級の火事があり、火元の後興善町周辺から市の西北部にかけておよそ2,000軒余りの焼失となり、焼死者も8人出していた。寛宝日記の記事によれば、犬121匹、猫297匹という被害(多くは行方不明であろうが)もあったようである。むろん時はまさに5代將軍綱吉の治政下で、例の生類憐愍令が次第に極端化していたため、こうした記録も残されたのであろうが、その数字の詳しきからすれば当時は長崎でも犬の戸籍が作られていたのであろうか。いずれにせよ橋の被害は記録されていない。

#### ⑲魚市橋——元禄12年(1699)3月

第九橋 在今魚街、元禄十二年三月、岡正恒建、徴士高玄袋為銘(図志)

この場合も、以降の諸書ともに筆を揃えているので問題はない。銘を為したという高玄袋(一覽の子、日



本名は深見新右衛門)は、前年の大井手橋と同じく銘をなした唐通事林道栄とともに、このころ書家としても極めて高い評価を受けていたところだから、これは兄に倣って弟の場合もということではなく、むしろその銘文の作製依頼も同時だったかと思われる。

また、この位置が比較的下流域にありながら、この時期まで架橋されなかったのは、すぐ下手に眼鏡橋があったという地の利も考えられるが、その右岸が今魚町と呼ばれたごとく、このあたりの川岸には魚市へ荷上げするための舟付場が設けられていたからであろうか。

## ②編笠橋——元禄12年(1699)

第四橋 在今博多街、元禄十二年、岸村氏夫妻建、  
(原書、朱字判注)  
一本云傍銚車渡迷津四字(図志)

本文自体については、港草だけが「夫妻」の二字を省くものの諸書同様である。ただし図志(写本)に割注記されていた点——それが朱字であったことからしても、図志の原文にあったかどうかは疑問視されるが<sup>2)</sup>——は、増補図志(写本)や古今集覧所引の志稿では

同文を記すものの、名勝図絵では「東渡迷津」の四字とし、増補長崎略史では「車渡明津」の四字としていて、少しずつ異なっている。宮田安氏も説かれていたように、いずれが正しいかは「石が出ねばわからない四つの文字であろう」<sup>3)</sup>が、敢えて推量するとすれば、志稿の著者はそれを実見していた可能性が高いであろうから、まず下二字の「迷津」の方はそれに従って置いてよいと思われる。しかし上の二文字の方は、元来「東」とあったのを志稿の著者が読み違えたという可能性が依然として残ろうから、いずれとも単純には決し難い。ただそれでも意味の方からするならば、橋を架けておきながら「東渡」が迷われるというのは不審であろうから、「車渡迷津」の方をよしとし、車での通行を婉曲に諫めたものと解されようか。おそらく創建当初の橋の形状が、相当に反りの強いものであったため、危険性が高いと判断されたからではなかろうか。そしてそうとすれば、度重なる改架によって殆ど平坦な橋面となっていたその橋[図12-2参照]について、金井俊行氏が明治20年という時点で「車渡明津」と記したのは、何となく分らないでもないような気がする。そしてまた西道仙がこの橋を「編笠橋」と命名したのは、既に説かれているように右岸の今博多町が「あめ

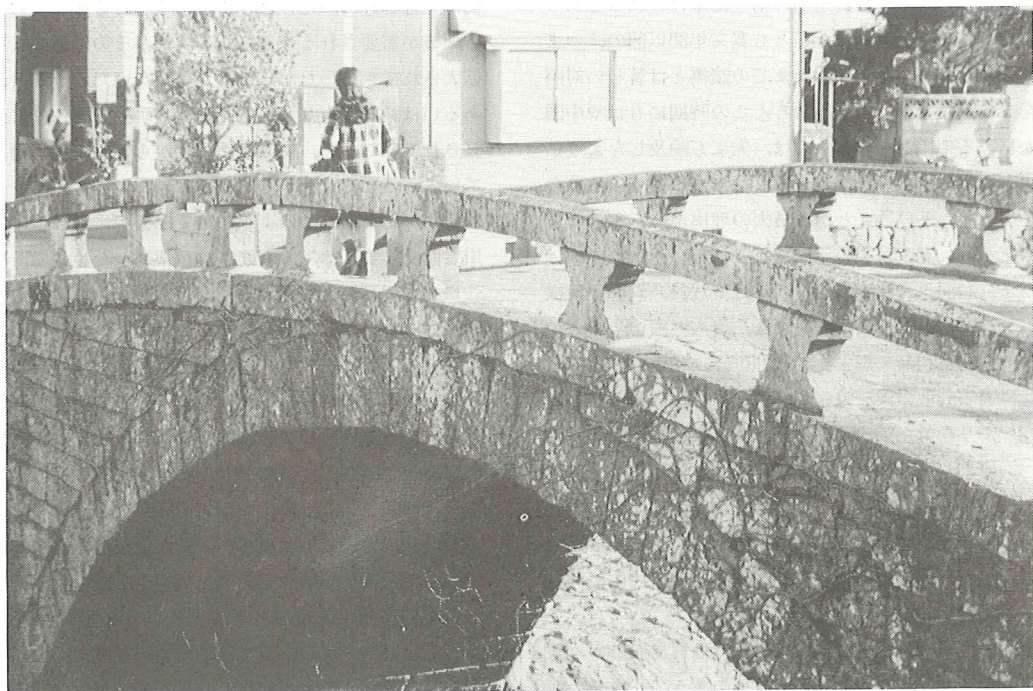


図12-2. 編笠橋(右岸上流側より)

がた町」とも呼ばれたこととの語呂合せと、かつてこの辺りには遊女屋があったというから、「編笠茶屋」(遊郭に通う人に、顔を覆う編笠を貸す茶屋で、京都島原の丹波口や江戸新吉原の大門外にあったという)の故事に連想を得てということであろうが、同時に道仙もまた「東渡迷津」と銘文を解したからかと思われなくもない。

一方、架設の時期については、元禄12年のいつかを知らうる史料はないが、同年には上にみた魚市橋が3月に竣工し、更に遡れば前年の11月に大井手橋が完成していたようだから、この橋の場合も魚市橋に続いて工事にとりかかったとみれば、竣工はその年の後半と考えておいてよいだろう。この頃の架橋に11月か12月の日付けを持つのが多いのは、たぶん大雨の多い夏場を避けて施工した結果だと推量されようから、この場合もやはり仲冬から晩冬にかけての完成だったとみれようか。

以上で元禄年間架設の5橋について一通り瞥見し終えたので、下にはこの時期における石橋建設について、その全体に共通した性格等をまとめておくことにしよう。

1) この時期の架橋はいずれも日本人によるものだったことが、その共通項の第一に挙げられるであろう。そしてそれは、少なくとも寛文年間以前の、つまり先に大別した第II期前半までの諸橋とは著しい対照をなす点だといえよう。むろんこの時期にもはや中国人による架橋がなかったのは、先にも論及したように唐人屋敷の建設以降、彼らは直接市中に関与する機会を失なったということが、最大の理由だったとみてよいだろう。寛宝日記の元禄12年4月条に、

一 右同〔元禄十二年〕卯四月十八日、両御上使様被仰付候は、唐人商売之儀、唐人共願申上候通、荷物目利無<sup>ニ</sup>惣入札<sup>ニ</sup>被仰付候、又銅口銭之内、通事共取申候三匁銀より匁匁、小宿口銭式匁之内より匁匁、二口<sup>ノ</sup>式匁唐人共<sup>江</sup>御出被下候、其段唐人共<sup>江</sup>可申由被仰付候事

一 牛皮之増銀、去寅<sup>ノ</sup>年分凡百四拾貫目余有之由、半分七拾貫目地下中<sup>ニ</sup>被下候、残<sup>リ</sup>七拾貫目は被召上、長崎中橋其他何ぞ修理之為<sup>ニ</sup>可仕由被仰付候事

とあったのは、まさに唐人との交流は貿易面へのみ限定しようとし、そしてその収益等を蓄えて「橋その他の公的な施設の修理資金」に当てようとする、以降の

姿勢が端的に表わされているといえよう。事実、その後の再架設時にあつては、唐人と日本人を問わず、喜捨による架橋というのは、僅かな例外を別として殆ど見られなくなるのであった。

2) 元禄年間架設の5橋の場合、大井手橋・魚市橋・編笠橋の3橋には何らかの銘があり、図志によれば阿弥陀橋にもそれはあったというから<sup>4)</sup>、この頃には架橋に際して銘文を刻むことが一般化もしくは流行していたとみれよう。むろんその先駆は一覧橋や桃溪橋にあったわけだが、特に後者の場合に初めて銘文中に架設者の名が刻みこまれていた点が、元禄年間におけるこの傾向を助長したといえようか。しかし同時に、この時代ではまだ、石工名まで刻まれた例は少なくとも中島川筋の石橋群に関するかぎり、一橋も知られるところではなかった。<sup>5)</sup>

3) 元禄年間の架橋は、それまでの架橋で取残されていた地点を一つ一つ埋める形で進行したわけであるが、しかしその順序もまた、それ以前の場合と同様、ほぼ必要度に応じた先後関係にあったとみてよいだろう。すなわちその順序づけは、おそらく架設者自身の意思にもとづくのではなく、むしろ町全体の立場が優先されていたであろうということである。たとえば、中島川中流域の空白地点をさしおいて、上流部の阿弥陀橋が先行されていたのは、まさにそのころそこにおける架橋が必要されるほどに、市街地がその付近にまで拡大されてきていたからにほかならないだろうこと、あるいは編笠橋よりも上手側の大井手橋の方が先に架設されていたのも、往来の便宜性からみれば理に適つていようこと、などがそれである。

しかしともあれこのようにして、市中における中島川と直交するすべての町筋に橋が架かったわけで、ここに中島川石橋群は完成をみたのであった。最後の橋が架けられた元禄12年とは偶々にせよ17世紀最後の年でもあったわけだから、中島川石橋群はまさしく17世紀の——中頃から終末にかけての——産物だったといことになる。そしてそれは、まず寛永13年(1636)に出島が完成して、ポルトガル人を市中から追い出してそこへ閉じ込め、次にオランダ商館をそこへ移転させつつも、元禄2年(1689)に唐人屋敷が完成するまでは、明末清初の動乱を避けた明朝遺臣をはじめとする大量の中国人を受け入れてきたまさにその時代であった以上、やはり中国文化の波状的な流入、その圧倒的な影響下に形成されたものとみるのが妥当であろう。しかも同時代には、やはり明遺臣の朱舜水によつ



て寛文年間に架けられたかと考えられる東京後楽園内の円月橋や、延宝2年(1674)創架の早鐘眼鏡橋なる福岡県大牟田市の水路橋といった、単発的で且つ本来的に通行用でない例外的存在を別にすれば、他地域での実用的な石橋の建造は全く認められず、平戸の幸橋でさえ元禄15年(1702)とやや遅れるのだったから、それはまさに長崎という都市の特殊性がもたらしたものであったとも言つてよいだろう。しかし一方、その末期にあってはもはや中国人による直接的な関与は見られなくなり、せいぜいその帰化二世達に銘文の制作を依頼するにとどまっていた。そしてこの中島川石橋群の成就した元禄12年には、その7月4日にそれまで約100年間の伝統を有してきた内町・外町の区別が廃止され、市中総町は——直接的には町年寄役が代行していたにせよ——少なくとも形式的には完全に奉行の支配下となったのである。このことは、以後の架橋をして、町々の、あるいは市全体のいわゆる「公共事業」へと変質させてゆく、その素地を醸成していったものと予想しうるところであろう。

〔註〕

## 第9節

### 1) 宮田安；前掲『中島川遠目鏡』28頁には、

ここに石造アーチ橋が架けられたのは、承応元年十二月(1652)で、明人平江府等建と、図志・志稿・名勝図絵などの記事が揃っている。

と述べられているが、それら諸書の記事はいずれも「季冬」とするのみで、12月と特定するのは今のところ増補長崎略史以外に見出されないようである。

### 2) 宮田安；上掲書29頁。ただし宮田氏は、それに続けて「光雲寺本堂前の石段には、この橋の親柱一本が保存されているが、かすかに残る文字をみると、古賀翁が書いておられるものと異なっている」とも指摘されている。

がしかし、同橋の左岸下流側たもとに立っておかれている嘗ての親柱2本の中の1本には、

嶋千太  
嶋讃岐 (欠損)

との刻字が残っているから、古賀十二郎氏がいわれた石欄は——「現在ではもう残っていない」のではなく——これであろうかと思われる。また、

光雲寺本堂前の石段踊り場(山門のうしろ)にト意地蔵などと共に安置されている親柱には、筆者の調査では次のような銘が認められた(□内は摩滅、欠損のため不明瞭な文字を示す)。

承應元年<sup>壬辰</sup>十一月嶋家之祖<sup>(間力)</sup>新造  
長六□幅壹間半改造長六間幅二間  
慶應□年<sup>丙寅</sup>四月

これによれば、文面はたしかに異なるものの伊勢宮側の伝承では高麗橋の創架は承応元年の11月としていたこと、そしてこの銘は慶応2年(1866)4月に、<sup>こうじ</sup>廻屋町の池島正助が同橋を架替えた(増補長崎略史)とされるとき、新たに彫り加えられたことが分かる。とは言え、他方の「嶋千太(夫)、云々」の銘とて、同じく慶応2年時のものかどうかは不明としても、さほど古い時代に遡るとは思われない。というのは、その「嶋千太夫」が島氏の初代・直重を指すのだとしても(但し、『長崎実録大成』(長崎文献叢書第一集第二巻、丹羽漢吉・森永種夫校訂、1973、長崎文献社)や長崎古今集覧などによれば、「島千大夫」とはその二代及び三代にも共通した名であることが知られるが)、「嶋讃岐」の方はおそらくその第十一代「嶋讃岐守重道」(天保9年9月より明治20年8月まで在職50年、嘉永4年3月10日讃岐守に任ぜらる——長崎市史神社教会部)のことに他ならないだろうからである。従ってもしそうだとすれば、古賀十二郎氏による銘文の読み方自体にも問題があったとしうるかも知れない。

- この点は、江戸時代の諸地図のいずれにも確認されるところだが、一層具体的には『ふるさとの思い出 写真集明治・大正・昭和 長崎』(1975、国書刊行会)82頁や1982年版『長崎事典 歴史編』(長崎文献社)329頁に所載する、大正初年以前の伊勢宮社頭の写真が証示しよう。なお現在でも下面のアーチ部分自体はそのままなのだが、上流側橋面が大正4年(1915)4月に斜めにコンクリートで増設されたため、随分その感が失なわれてしまっている。
- 長崎県立図書館蔵の全2冊本による。なお同図書館には、文化9年(1812)11月の補訂本も蔵されている。
- 『長崎市史』地誌篇、神社教会部(昭和13年、1967再刊、清文堂出版)には、伊勢宮社記に拠って、承応元年 陸手二十八町の乙名中の寄付により

て神門前に石橋を架けられた

と記すが、これも内実はほぼ同様に理解してよいだろう。

- 6) このあたりについては、平久保章『隠元（人物叢書96）』（1962，吉川弘文館）が詳しい。

ただし、同書79頁に掲載する13人の名前で、渤海久兵衛と高広科は同一人物即ち高一覧の重複でないかどうか、また宮田安；前掲『崇福寺論攷』424頁では加えて黙子如定の名もあげられているが、一体史実はどれが正しいのか、識者のご教示をお願いしておきたい。

- 7) 長崎港草巻第十一の「伊勢祠」の項には、

伊勢祠ハ第二橋ノ北ニアリ、即内外宮二所大神宮ヲ祀ル、寛永十六年南覚院存祐（唐津之産）伊勢渡会長官ノ許可ヲ得テ仮祠ヲ新高麗町（因祠改伊勢町）ニ建ツ、正保三年宅地五ヶ所寄附アリ、七月十一日新始メアリ十一月廿八日造畢ス、全年出雲国嶋上馬允直重来リ南覚院ノ養子トナリ（数文字脱カ、引用者）社内ニ建ツ、明暦元年九月十六日初テ祭祀ヲ修ス、……

とあるのが参考されよう。

- 8) 前掲『長崎市史』地誌篇、神社教会部。ただし、この記事はおそらく伊勢宮の社記の類に拠ったものかと推測されるが、それを全面的に信用してよいかどうか疑問なこと、下文に説く通りである。というのも、上引（註9-7）港草の記事と同様、古今集覧でも単に「正保三年、伊勢町川端ニ五ヶ所の屋敷地を寄附有り」とあるのみでそれが確証されず、逆に「志稿云、……宝永七年〔1710〕、刺使平信就菅原定持同修復」とあるごとく、奉行の直接的な関与が確認されるのはもう少し遅れるようだからである。

- 9) 額川藤左衛門道隆の数多い事績やその家系等については、宮田安「陳冲一を祖とする額川氏家系」長崎談叢第60輯、1977（同『唐通事家系論攷』1979，長崎文献社，再録）が詳しい。

- 10) 一瀬橋付近の景観は、また「一瀬晴嵐」として「長崎八景」の一に数えられることもあった。長崎十二景や同八景については『長崎名勝図絵』首巻に詳説されている。

- 11) この点は、『長崎市の文化財』第6版（1980，長崎市教育委員会）の解説に従った。ただし、長方保雄『桜馬場町今昔誌』（1971，同町二組自治会）によれば、幹線道路筋が古橋の方から新「中川橋」

の方へ変更されて国道となったのは明治14年のことだというから、その当時の形式と名称は不明ながら新「中川橋」自体は既にそのとき創架されており、現在のそれは大正7年時点での改架だと考えられる。

- 12) 宮田安；前掲『中島川遠目鏡』36頁。

- 13) たとえば藤岡通夫『城と書院（原色日本の美術12）』（1968，小学館）165～6頁には、荻生徂徠のいう石垣の積み方の3種類、すなわち野ヅラ、打込ハギ、切込ハギに言及して、「きわめて大ざっぱな言い方をすれば、野ヅラがもっとも古くて、天正・文禄（1573～96）年間、打込ハギは慶長（1596～1615）年間、切込ハギは寛永（1624～44）年間に降とって大過ないが……」と述べられている。

- 14) 太田静六；前掲『眼鏡橋 日本と西洋の古橋』64頁，など。

- 15) この碑石が、かつて川の中に捨てられていたのを、昭和5年2月12日、「長崎史談会津田〔繁二〕幹事の特志に依り拾ひ上げられ一覽橋袂稲荷小祠の旁ら梧桐の下に恰好の野石を台座として再建された」こと、林源吉；前掲「石橋風景」に記されている。

- 16) 但し、寛永長崎図の方によれば、古町筋（同図によれば「寄合町通り」とある）を川向うに延長した道はそのまま寺町通りにまで通じているように描かれているが、この点は正保長崎図の方の記載に照らしておそらく誤りかと思われる。むろんこの道は今日でも中通りに突当ただけで、そこから寺町へ直接に出る道はない。また、神戸市博蔵の屏風絵では、一覽橋よりもむしろ東新橋（板橋に描かれる）を渡った道筋が興福寺の前へ出るように描かれているが、これも不正確というべきであろう。

- 17) 以上の点は、長崎市史地誌篇のほか、平久保章；前掲『隠元』、津田繁二『国宝指定の興福寺』（長崎談叢第11輯，1932）などに、ほぼ同様な記述があるのに従った。恐らくその典拠はいずれも例えば古今集覧に、

云稿云、（中略）承応三年、黄檗国師<sub>レ</sub> 聘東渡、即日迎入<sub>レ</sub> 寺、大揚<sub>二</sub> 法幢<sub>一</sub>、徒衆数百人、諸方<sub>ヨリモ</sub> 亦有<sub>二</sub> 至<sub>ル</sub> 者<sub>一</sub>、案<sub>二</sub> 国師<sub>ノ</sub> 年譜<sub>一</sub>、明年乙未師慮<sub>二</sub> 湫隘<sub>ニシテ</sub> 不<sub>レ</sub> 能<sub>二</sub> 広<sub>ク</sub> 容<sub>ル</sub>、重<sub>ネテ</sub> 建<sub>二</sub> 外堂并茅房<sub>一</sub>、一带<sub>ニシテ</sub> 以<sub>二</sub> 棲<sub>マシム</sub>



雲衆ヲ、諸国ヨリ所<sup>ス</sup>遣<sup>ス</sup>之資ヲ輸建ニ山門ニ、  
扁ニ其額ニ曰ニ東明山ニ、……

とあるあたりであろうが。

- 18) 平久保章；前掲『隠元』97頁。以下の記述もこれによるところ多いこと、お断りしておく。
- 19) 宮田安；前掲『中島川遠目鏡』39頁。
- 20) 飯田須賀斯；前掲『長崎に於ける支那建築』
- 21) この点は、昭和58年10月22日、長崎県立美術博物館で行なわれた宮田安氏の講演「唐寺と黄檗僧」の会場で配布された「講演要旨メモ」に拠り、筆者は未だ原典等に確認していないことをお断りしておく。但し、『花蠻交市治聞記』一（『長崎県史』史料編第四、1965、吉川弘文館、所収）などには「明曆三百年十一月晦日寂ス」とあってそれが追認される。しかし『通航一覧』（1967復刻、清文堂出版）巻227には「明曆三百年十一月廿日寂」とあって、誤植かもしれないが10日のずれが認められる。むろん長崎市史地誌篇の興福寺の項に「正保甲申元年十二月三十日示寂 世壽六拾壹」とある年時は全くの誤りで（年令の方は正しいようだが）、この年時にもし根拠があるとすれば、恐らく住持を辞した時期を示すものかと考えられる。
- 22) しかしながら中島川石橋群では、創建当初の勾欄親柱に刻銘があったという徴証は乏しく、後述のように桃溪橋の下流側、向って左のスパンドレル部内に銘板が収められていたのがよく知られる唯一の例外である。  
ただし、眼鏡橋の橋脚上スパンドレル頂部の位置に見られる大きめの石は、構造的役割を別にして形状的には明らかに銘板の様相を呈しており、しかも長崎古今集覧名勝図絵に所載する「酒屋町目鏡橋之図」にはそれがもっと中央部に大きくあり、そこには何やら刻字があるように描かれていた点は、やはり気掛りなところであろう。あるいはもしかすると、この橋の石欄干が流れ落ちたとされる寛政7年（1795）の洪水以前には、上述の図に見られるような状態だったか——但しその場合には、銘板は上流側のみにあり、下流側には同書所載の前掲「石橋架設之図」からしても何もなかったであろう——と疑われなくもない。そしてもしそうだったとすれば、その銘板には創架時の功績を記念して「寛永十一年、興福寺住持僧如定建、慶安元年、平戸好夢重修」といった文面が刻まれており、これが石橋としての眼鏡橋の寛永11

年黙子如定創建説を形成したかと考えられなくもない。もとより確証は全くないので、詳しくは後考を俟たねばならないが、一応の推論の可能性として記しておく。

また、古今集覧所引志稿や増補図志割注に見えた「是石橋始創者」という一句について、先には図志以前の古記録に「是れ石橋を始めて創る（又は石橋の始創）は、慶安元年」とする伝承があったその名残りではないかと推測したが（第2節）、これはいささか穿ちすぎた見解のようで、その一句は従来通りに「是れ石橋の始創なる者なり」と訓んで、志稿又は図志一本の著者が挿入した注記と解しておく方が無難かと今は考えている。もとより、だからといってそういう伝承がそれ以前に全くなかったというのではなく（事実、私見においても眼鏡橋が石橋の創始であることには何ら変りがないから）、また石橋としての眼鏡橋の創建を慶安元年だと解する試見を、現時点で撤回する意は更にはない。

- 23) 上記の推量とは全く別に、この碑石は一覧橋架設の工事中に失命した人の供養塔であるとか、あるいは何らかの理由で——例えば、それがいかなる史料にもとづくのか確かめていないが『新長崎年表』の1655年（明暦元）条に「四月、長崎市中洪水、死者二」とある洪水の影響などで——工事が進捗しなかったため、その無事完工を祈念しての鎮祭碑だったとか、その他にも色々考慮の余地があろうかと思う。それにまた、背後に官命の予想されないこうした橋で、しかもこのように古い時代の架設にも拘らず、図志以下に「明暦三年五月」と詳しくその時期が記録されていたのは、もしかすると逆にこの碑石の銘文に拠ったかもしれないであろうから、この5月を以て一覧橋の竣工時とすることは、場合によっては疑われてよいかも知れない。
- 24) 長崎古今集覧巻之五の序文には、「志稿」すなわち「長崎志稿」もまた積元亨（字は慧通）つまり長崎君舒の著であり、それは古今集覧の著者松浦東溪が「故家ヲ搜索スルニ」同一巻を得たものであることなどが記されている。そしてそれより引くところの「証録」末尾には「乙未仲冬長至日」との日付があるから、志稿もまた正徳5年の著であることが知られるわけである。むろん、しからば図志との関係はいかんといい点はなお詳しくは不

明瞭であるが、多分は志稿をもとに後年まとめ上げられたのが図志であろうと推測される。先に第2節において、やや唐突にだったが「志稿」とはおそらく「長崎図志稿」の略かと推量される、と記したのは、上述の「証録」冒頭には「余修長崎志、蓋実録也」とあったから、長崎君舒自身にそういう「図志の稿」という意識があったかどうかは別にしてだった、とお断りしておかねばならない。

- 25) この点は、林源吉「石燈籠と長崎」(長崎談叢第9輯, 1931)に記す、新町の横田萬次郎氏旧邸内には「明暦三年丁未<sup>(マツ)</sup>五月初架、享保六年辛丑七月洪水潰墜、元文二年丁巳六月再架、石工谷川清兵衛」と刻銘のある擬宝珠造り親柱を応用した石燈がある由、によって知られる。

#### 第10節

- 1) 長崎港草の巻第九「長崎炎焼」の項には、  
家ヲ作ルニ願ニ因テ銀貳千貫目大坂ヨリ御取寄ナサルベキ為メ……八月五日拝借アリ、内町ニ千貫目、外町ニ千貫目、内町ハ間口一間ニ銀貳百九拾目二厘三毛三弗ヅ、(中略)類焼ノ寺社<sup>(三カ)</sup>二十ヶ所ニ貳拾三貫貳百五拾目、十ヶ年賦ニ拝借仰付ラル、上納ハ翌年寛文四年甲辰ヨリ延宝元癸丑年マデ皆納ス……由旧記ニアリ  
とあって、10ヶ年の年賦で返済したことが知られる。
- 2) この点については、既に前掲『昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査報告書』に要領よくまとめられている。
- 3) 但しこれは、寛宝日記に、  
卯年長崎大火事之節、町中道はゞせまく有之間、今度町々道はゞ広め可申由被仰付段々広メ申候、尤焼不申候町は右之尺<sup>二</sup>而<sup>一</sup>御座候事、右<sup>ハ</sup>島田久太郎様被仰出候  
とあるように、焼け残った町々には及ばなかったようであるが、しかしその後も「火災を契機とした、町による自律的な道路拡幅」が行なわれていったことは、上掲報告書に指摘されている。
- 4) ただし、その屏風絵によれば、町屋の大半は隣家との境界にあたる両側妻面において、その屋根を一段高く上げたように描かれていたから、そこには漆喰塗込めの防火壁がとられていたことは考えられるかも知れない。
- 5) 宮田安；前掲『長崎崇福寺論攷』433頁。この前後

の記述は、同書に負うところ多いことお断りしておく。

- 6) これがいかなる史料を典拠としたものか、筆者はよく調べていないが、寛宝日記の寛文12年条に記す調査結果(刊本では石橋等に関する記述はない)とその人口惣数は合致しているので、概数としては十分採るに足るであろう。

- 7) 但し、古今集覧所引の志稿に、

在<sup>二</sup>鍛冶屋町<sup>一</sup>、初建<sup>二</sup>廊橋<sup>一</sup>又構<sup>二</sup>土橋<sup>一</sup>後改建

とある廊橋と土橋の順序は逆であろう。そして増補長崎略史の橋梁志に、

旧木廊橋を架す、後土橋とし、又木廊橋を架すと記していたのは、恐らくそれに拠ったための二重の誤まりかと思う。思案橋が寛文年間以降、ふたたび廊橋となったことは史料上に検証されないからである。

- 8) 思案橋が明治8年に石橋に改められた点は、ほぼ同時代の証言として港草に加えられた西道仙の付記(道仙按明治八年石橋ニ改ム)があり、またその構造形式と規模については、増補長崎略史の橋梁志に「石造円形、長四間七合、幅二間九合」とあるによって知られる。このほか大正3年の架替は、『長崎市制六十五年史』前編(1958、長崎市役所総務部調査統計課)に拠った。
- 9) 古今集覧所引志稿と同じ誤まりは、増補図志における文竜の注記、港草に加えられた西道仙の付記、そして増補長崎略史の橋梁志などに引継がれていた。
- 10) 宮田安；前掲『中島川遠目鏡』48頁。
- 11) 彭城仁左衛門と林道栄の経歴等については、宮田安；前掲『唐通事家系論攷』が詳しく、以下の記述もこれによったところがあるのをお断りしておく。
- 12) 古賀十二郎；前掲『長崎開港史』97頁。

#### 第11節

- 1) ただし、これ以前にも寛文3年には奉行屋敷編入分の代替地として、浜町川筋の海に801.6坪の埋立てがあり、また遅れては元禄8～9年に大波止のさらなる増築もあるが、时期的にややかけ離れているため含めなかった。
- 2) 増補長崎略史の橋梁志では、  
此年(延宝6年)五月下旬の洪水に橋將に崩れんとす、吏員「クサビ」を以て之を護す、因り



てクサビ橋と呼ぶ

と説明していたが、まず「五月下旬の洪水」とあるのは従えないし、またクサビを打ったのが吏員だというのは——その架橋工事が奉行所の監督下になされたという点は賛同したいが——何に拠られたのであろうか、疑わしく思われる。

- 3) この絵図は、『古長崎地図帳』（1977、京都古典同好会）にも黒白の写真版で収載されている。
  - 4) 下引は、いずれも前掲：『出島蘭館日誌』上巻、による。
  - 5) 正保頃の長崎図と往古長崎図について、今まではその画面の大きさが異なることから、全然別系統のものと見做してきたが、未だ詳しく点検はしていないものの、例えば港湾内に描かれた船の位置などからすれば、いずれか一方が他方の原図であった可能性もあろうかと思われる。したがって若しそうだと確定すれば、両者に描かれた「眼鏡橋」について、正保4年以前の姿を示す二つの別の証拠とするのがやや難しくなろうことは、言うまでもない。
  - 6) 正保長崎図に見られる出島の特徴としては、表門が江戸町側にあることのほか、差当たって次の各点が指摘されよう。
    - a) 出島の北西部の後にいう水門にあたる部分は、板塀の2ヶ所の平門からそれぞれ小さな階段が水中に延びているだけで、凸形の土地の張出し部自体もまだ作られていないこと。したがって島の形は、まさに純粋な扇形となっていること。
    - b) 島内の街路は、後世のごとくT字型でなく十字型となっていること。
    - c) 島内の家屋は、6棟ほどの平屋建ての小屋（これも瓦葺、漆喰塗りだから倉庫が殆どであろう）を除き、街路に面して並ぶ20数棟はすべて2階建てで、屋根は瓦葺（時代からすれば本瓦であろう）、壁は漆喰塗りとみられる。つまりこれは、これらの家屋が土蔵造りに近いことを示し、出島内は基本的に倉庫群の集積だったことを意味しようか。
- なお、寛永～正保年間の三つの絵図について、その製作年代を推考する際に持出されていた分知町近くの「3階建の大屋」については、先に註4－8で言及したところをむしろ次のように補訂すべきかと考えている。すなわちその際には、越中哲也氏の所説を踏襲して、その大屋を伴天連屋敷

であり、且つかつてのサンタ・マリア教会〔又はサン・パウロ教会——これが実際には同一のものを指し、サン・パウロの方は本来「コレジョの名前で、時々教会にも与えられた」という。ディエゴ・パチェコ『九州キリシタン史研究』1977、キリシタン文化研究会、148頁〕だとしたのだが、この後者の方、即ちそれをかつてのサンタ・マリア教会とみえることは断念すべきであろう、というようにである。何故ならば、サンタ・マリア教会自体は、アビラ・ヒロン『日本王国記』（大航海時代叢書XI、1965、岩波書店）の第22章に説くように1614年（慶長19）の11月に取壊されたことが明白だからである。したがってそれらの絵図に描かれている姿は、それが当時「伴天連屋敷」と呼ばれていたことからすれば初期の同教会に付随する建物だったとすることは許されても、あくまでその図中ではかねてそれを賜わったという高木作右衛門忠次の屋敷そのものとみるべきだった、ということである。むしろこう理解すれば、その大屋が記載されていることはそれらの絵図の原図が慶長19年以前に遡ることを示すのではなく、まさに寛永ないし正保年間の有様をそれぞれに写しているともてよいこと、言うまでもない。

また、正保長崎図や往古長崎図の場合、その出島の部分が図中で最も古い年代を示すところとなって、それらの成立年代に関する幅を若干広げることになるだろうが、しかし註4－7で述べたような他の記載内容からすれば、その最終的な製作時期を正保3年～同4年の前半頃とみることを否定しきるには及ばないであろう。

- 7) 宮田安：前掲『中島川遠目鏡』60～62頁。なお次に引く同橋の銘板文字もこれに所載するところに拠ったこと、そして以下の記述もこれよりの引用が多いこと、お断りしておきたい。
- 8) 県立図書館の渡辺文庫にある渡辺庫輔氏抄写の皓台寺過去帖によれば、元禄十一戊寅年六月八日の項に「新大工町 ト意死す 至山ト意上座」とあり、これに従えばト意は死亡した時点では新大工町に住していたことが知られる。また、同帖の寛永十九壬午年六月廿一日の項には「五島町 平戸道喜 悦山道喜信士」とあって、先に言及した道喜の寛永19年没説がこれを典拠としていたことも確認される。
- 9) 引用は、丹羽漢吉校訂『長崎虫眼鏡・長崎聞見記・

長崎縁起略（長崎文献叢書第一集・第五巻）  
1975，長崎文献社，による。

- 10) 新橋の架設年代について，名勝図絵では「寛文中建つ」とあるが，寛文13年は9月21日改元して延宝元年となるから，図志にいう同9月20日渡初めとすれば，名勝図絵の説もかろうじて成立することになる。したがってこの点は，港草に加えられた「道仙按，寛文中木橋ヲ架ス，享保二年石橋ニ改ム」という西道仙の解釈が首肯され，増補長崎略史の説は，それが何に拠られたかは不明ながら，従いしえないとしてよいだろう。また古今集覧所引志稿に「寛永中建」とあったのは，単なる誤植であろうか。

なおこの橋の名が「本新橋」となるのは，やはり港草に加えられた頭注よりして，西道仙の命名と推測される。

#### 第12節

- 1) 原田伴彦『長崎』（1964，中公新書）には，唐人屋敷の建設理由として，

第一は，このころしきりにふえてきた密貿易を取り締るためであり，第二は，取引を統制し，輸出を支える銅の価格を安定させ，唐人にそれを安値に買い叩くチャンスをあたえぬためであった。第三には，キリシタンの取締りがあった。（中略）このほか唐人取締りの理由として，彼らがもたらす商品の魅力のために，とかく婦女子や人妻などと風紀上の傳乱をおこしやすいという点がくわえられている。

と整理されているが，ほぼこれに尽きると言ってもよいだろう。

- 2) 事実，古今集覧によれば，志稿云としてその注記部分があるとし，「図志ニハ傍ヨリ以下ノ文無シ」としていた。いずれにせよここにおいても図志一本とは，志稿の可能性が高いことが証示されよう。
- 3) 宮田安；前掲『中島川遠目鏡』84頁。
- 4) 宮田安；上掲書71頁には，「元禄三 山善爾 と彫り込みがある石が今もなお橋の下に放置されている」と書いておられたが，この橋には崩落の記録がなく，寛政7年の洪水で大破損したのみであったから，それはおそらく創建当初の銘石とみてよいであろう。
- 5) この点からして，滝ノ観音のらん橋における親柱付近の後補壁石部分に，

〇 三庚辰年

茂弥市郎

同 清 六

八月吉日

と刻まれていることを発見された山口祐造氏は，その年時を元禄13年（1700）と解されたのだが（同；前掲『石橋物語』中巻），これはいささか疑問視される。即ち同じ干支は文政3年（1820）にも当嵌まり，またその方がその石の後補であることと，石工銘のある点を無理なく了解せしめてくれるだろうからである。

とは言え，これはらん橋の架設年代に直接影響を及ぼすものでは何らなく，滝ノ観音（霊源院）そのものの寺観整備の状況からすれば，山口氏の推定される通り元禄年間の架橋と考える余地は十分あろうし，先に指摘した中川橋（古橋）との技術的近さからすれば，さらに遡って寛文年間頃という可能性もなくはないかと思われる。

#### 〔上・中篇訂正〕

〈上篇〉	（誤）	（正）
193頁 右4	とそろで	→ところで
205頁 右16	1333創架	→1333年創架
206頁 右下から6	(1676)	→(1576)
211頁 右14	想像を	→想像が
213頁 左14	著者	→著書
215頁 左2	本図には	→本図並びに正保長崎図には
同 左16	指月橋	→高雄橋
〈中篇〉		
227頁 右2	詳価	→評価
228頁 右下から8	根起氏	→根起氏
234頁 右11	手助い	→手伝い
238頁 右25	眼鏡橋で	→眼鏡橋の

#### 〔追記〕

本篇稿了後に初めて——当然予め参照すべき性質のものながら——下記2論文に接しえた。

- ・中村質「初期長崎地図に関する書誌的考察」日本歴史第235号，1967-12。
- ・越中勇「『寛永・正保・寛文長崎図』について」長崎県立美術館博物館研究紀要第2号，1974。

この両論文には，本稿中に言及してきた寛永長崎図や正保長崎図，あるいは寛文末頃の屏風絵等について，その図面内容の年代や製作年時等に関して既述の私見



とは幾分異なった解釈が提示されており、そしてその論拠として筆者の気付かなかった点が既に説示されていることをも知りえた。これらについての筆者の見解は、改めて検討の上、続篇において論及することにしたいが、少なくとも現時点では、それにも拘らず既述

の拙見を根本的に改訂する必要はなかろうと考えている。がともあれここでは、先行の研究の存在並びにそれとの異同に不注意であったこと、深くお詫びしておきたい。(1984年8月6日記)